

石川県埋蔵文化財情報

第 27 号

巻頭図版（金沢城下町遺跡（丸の内7番地点）、北方池の下遺跡、長池カチジリ遺跡）

平成23年度上半期の発掘調査から調査部長 福島正実…(1)

発掘調査略報

北方池の下遺跡（珠洲市）	(2)
木白モンシヨ遺跡、小竹ボウダ南遺跡、小竹スナダ遺跡（中能登町）	(4)
畝田C遺跡、畝田・無量寺遺跡（金沢市）	(6)
金沢城下町遺跡（丸の内7番地点）（金沢市）	(8)
額新町遺跡（金沢市）	(10)
長池カチジリ遺跡、横江古塚敷遺跡（野々市市）	(12)
米永ナデソオ遺跡（白山市）	(14)

平成23年度上半期の遺物整理作業

(16)

環日本海文化交流史研究会の記録

(19)

はじめに	所長 三浦純夫…(19)
珠洲市野々江本江寺遺跡出土木製塔婆類について	伊藤雅文…(20)
中世日本海域の墓標 その出現と展開—九州—	中島恒次郎…(23)
山陰における中世前期の墓標と墓	中森祥…(26)
福井県の中世墓標の出現と展開について	
—福井県における中世墓の展開と石造物—	赤澤徳明…(29)
加賀・能登における古代末～中世前半期の墓地と墓標	安中哲徳…(32)
富山県の様相	島田美佐子…(35)
越後の墓標—14世紀以前を中心にして—	水澤幸一…(38)
東北地方の塔婆類と野々江本江寺遺跡出土塔婆	山口博之…(41)
討論と展望	魚水環…(44)

調査研究

埋蔵文化財センター周辺遺跡の紹介	岡本恭一…(47)
------------------------	-----------

2012年3月

財団法人 石川県埋蔵文化財センター

写真解説

金沢城下町遺跡（丸の内7番地点）

第4面遺構完掘状況遠景（南から）

金沢城跡の北東側を区画する白鳥堀に面した金沢城下町の遺跡である。調査区は、金沢地方・家庭・簡易裁判所の敷地内に位置しており、江戸時代の城下町絵図では加賀藩の公事場（現在の裁判所）や、岡嶋備中・多賀典膳などの有力武士の屋敷が描かれている区域に当たる。

今回の調査は平成21年（2009）から継続の第3次調査であり、北側に残った最下層面の第4面、約830㎡を対象とするものである。

調査の結果、中世後半～近世前半にかけての石組や素掘りの井戸、礎石建物、掘立柱建物、区画溝、平面長方形の池状遺構など多数の遺構を確認したほか、江戸時代前期頃を中心に、土師皿や陶磁器類、金属製品や木製品、漆製品など多様な遺物が出土した。

第4面屋敷地区画全景（南上から）

幅0.4～1mの素掘りの溝で区画された、屋敷地とみられる東西約20mの方形区画を確認した。東溝が途中で途切れており、東側を正面とする屋敷地が想定される。加賀一向一揆の拠点・金沢御堂下に形成された寺内町関連の遺構の可能性も考えられ、注目される。



第4面遺構完掘状況透景(南から)



第4面屋敷地区画全景(南上から)

写真解説

北方池の下遺跡 平地式建物

縄文時代晩期の集落跡を確認した。主な遺構には平地式建物があり、その建物は一部推定復元によるが、柱穴8基が配置される。柱穴は径50cm前後、遺構検出面からの深さ20cm前後を測るものが主体をなし、概ね等間隔で楕円状の環をなす。

長池カチジリ遺跡（中央奥・住宅地の対岸 着手前）と横江古屋敷遺跡（手前）

安原川河川改修工事に伴い、野々市市域の現河川右岸の2遺跡、1,440㎡を調査した。周辺には弥生時代終末期頃を中心に各時期の集落が広範囲に展開している。今回の調査では両遺跡ともに旧河川等による削平を被っていたが、長池カチジリ遺跡では掘立柱建物が検出されるなど、居住城の一部であることがわかった。



北方池の下遺跡 平地式建物



長池カチジリ遺跡（中央奥・住宅地の対岸 着手前）と横江古屋敷遺跡（手前）

平成23年度上半期の発掘調査から

調査部長 福島 正実

平成23年度は、石川県教育委員会から20件の発掘調査を受託した。前年度で北陸新幹線関係の発掘作業の大半が終了したことから、今年度は県関係事業に係る小規模で新規の調査が多くなった。関係機関ごとの件数は、国土交通省が3件、鉄道・運輸機構1件、最高裁判所1件、県環境部1件、県農林水産部2件、県土木部11件、県教育委員会事務局1件である。本号では平成23年4月から7月にかけて実施した7件の発掘調査の概要を紹介する。

珠洲市北方池の下遺跡では縄文時代晩期の平地式建物などを確認し、同期末頃の土器がまとめて出土した。また、中世の掘立柱建物なども確認した。

中能登町水白モンショ遺跡、同町小竹ボウダ南遺跡、同町小竹スナダ遺跡の調査は、幅数メートルの細長い調査区であったが、それぞれ集落跡であることを示す、中世の掘立柱建物や井戸、中世の柱穴、弥生時代中期の柱穴などを確認した。

金沢市畷田C遺跡は弥生時代、奈良時代・平安時代の集落跡であり、これまででも広範囲の調査が行われてきた。今年度の調査区では奈良時代・平安時代の土坑、溝、水田、足跡を確認し、弥生土器も出土した。同市畷田無量寺遺跡は奈良時代・平安時代の集落跡であり、掘立柱建物や井戸などを確認した。同市金沢城下町遺跡では金沢城跡に接する丸の内7番地点の調査を継続し、近世武家屋敷内の庭園やそれ以前の屋敷地区画など多くの遺構を確認した。同市額新町遺跡では遺跡北縁部の調査を行い、平安時代の掘立柱建物などを確認した。

野々市市長池カチジリ遺跡、同市横江古屋敷遺跡は近接した弥生時代後期の集落跡であり、前者では掘立柱建物など、後者では溝を確認した。

白山市米永ナナエオ遺跡は平安時代の集落跡である。東縁部の調査を行い、前年度に一部が検出された確認掘立柱建物などを確認した。

平成23年度発掘調査遺跡

No.	掲載遺跡	遺跡名	所在地	調査面積(m ²)	主な時代	関係機関	関係事業
1		正院小路遺跡	珠洲市正院町	870	中世	石川県土木部	主要地方道大谷線博飯田線
2	○	北方池の下遺跡	珠洲市上戸町北方	350	縄文、中世	石川県農林水産部	ふるさと農道整備
3		七尾城跡	七尾市古城町ほか	2,540	古墳、古代	国土交通省	能越自動車道七尾水見道路
4		花園・黒崎遺跡	七尾市花園、黒崎町	1,400	古墳、古墳	〃	〃
5		千野遺跡	七尾市千野町	1,000	弥生、古墳	〃	〃
6		福井ナカミチ遺跡	志賀町福井	1,200	平安	石川県土木部	主要地方道志賀田鶴浜線
7	○	水白モンショ遺跡	中能登町水白	720	古墳、平安、中世	石川県農林水産部	県営ほ場整備
		小竹ボウダ南遺跡	中能登町小竹		弥生	〃	〃
		小竹スナダ遺跡	〃		中世	〃	〃
8		多田フルガタン遺跡	かほく市多田	1,800	古墳、中世	石川県土木部	主要地方道高松津線(河北福所道路)
9		熊江ジュウケンザリ遺跡	かほく市熊江	1,250	弥生	〃	〃
10		加茂遺跡	津幡町加茂	2,100	弥生、奈良・平安	〃	〃
	能瀬南B遺跡	津幡町能瀬	弥生、古墳、中世、近世		〃	〃	
	大友A遺跡	津幡町大友町、五両町	古墳～奈良・平安		石川県環境部	石川県水道用供水供給	
11		大友E遺跡	金沢市近岡町	790	弥生、奈良・平安、近世	〃	〃
		直江西遺跡	金沢市直江町		弥生～古墳、室町	〃	〃
		畷田C遺跡	金沢市畷田中ほか		弥生、奈良・平安	石川県土木部	一般国道305号(海部幹線)
13	○	石川国跡(石川)跡	金沢市丸の内	830	中世、近世	最高裁判所	名古屋高鉄金沢支部・金沢地区農業改良会
		小立野ユメノマチ遺跡	金沢市小立野5丁目	4,620	江戸	石川県教育委員会	県立金沢商業高等学校
15	○	額新町遺跡	金沢市額新町1丁目	1,080	古代	石川県土木部	額新営住宅
16	○	長池カチジリ遺跡	野々市長池	1,440	弥生	〃	二級河川安原川
	米永ナナエオ遺跡	〃	〃		〃	〃	〃
17	○	米永ナナエオ遺跡	白山市米永町	950	平安	鉄道・運輸機構	北陸新幹線
18		加気寺八反田遺跡	白山市加気寺町	1,390	〃	石川県土木部	主要地方道鶴巻美川インター線
19		右子町中ノバツ遺跡	能美市右子町	750	弥生、中世	〃	一般国道和気寺井線
20		宮の奥跡塚	小松市蓮泉寺町	2,200	中世	〃	主要地方道小松松伏線
計		20件(本号掲載3件は大字で掲載予定)		29,110			

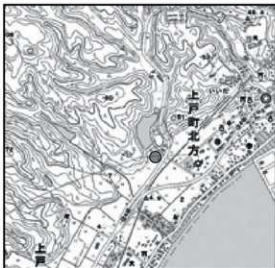
きたがたいけいしした 北方池の下遺跡

所在地 珠洲市上戸町北方池内

調査面積 350㎡

調査期間 平成23年4月11日～同年5月17日

調査担当 北川晴夫 端 猛 畑山智史



遺跡位置図 (S=1/25,000)



調査区位置図 (S=1/2,000)

調査成果の要点

- ・縄文時代晩期、中世の集落跡を確認した。
- ・縄文時代晩期の平地式建物、土坑、小穴などを検出した。
- ・北陸地方における縄文時代晩期末頃の指標となる土器がまとめて出土した。
- ・中世の掘立柱建物、溝などを検出した。

遺跡は宝立山系丘陵と飯田湾の間に広がる沖積地に立地する。今回の調査は、ふるさと農道整備事業に起因し、平成15年度のは場整備事業に伴う調査区の東側にあたる。

調査では、地表下50～80cmの標高3.7～4.0mの高さで縄文時代晩期の遺構や遺物を確認した。検出した遺構には平地式建物、土坑、小穴などがある。平地式建物は一部推定復元によるが、柱穴8基が概ね等間隔で楕円状に配置される。その柱穴は径50cm前後、検出面からの深さ20cm前後のものが主体をなす。

調査区の北側と南東側は地形的に低く遺構が非常に薄いことから遺跡の縁辺部と考えられる。遺跡の中心は北西から南西側の丘陵裾部方向に位置していると推定される。

出土した遺物には、土器、石器などがある。土器は縄文時代晩期末頃に帰属し、調査区全面で確認され、特に、調査区南端からまとめて出土した。石器は石鏃、石錘、打製石斧、敲石、スクレイパーなどがある。これらの石器の石材は珠洲市産出の玉髓質泥岩（横山真脇石）などが使用されていることから、地元石材の流通や消費を考えるうえで一助となる。またオニグルミ、トチなどの植物遺存体が出土し、これらは当時の環境や食物の消費を知る手がかりとなる。

今回の調査は小規模なものであったが、縄文時代晩期の遺構、土器、石器などを確認し、多くの成果が得られた。奥能登の縄文文化を語るうえで貴重な資料となる。

なお、中世の掘立柱建物（2間以上×1間以上）や溝、小穴、珠洲焼、古墳時代から古代の土師器、須恵器などの縄文時代以外の遺構や遺物も確認した。

(北川 晴夫)



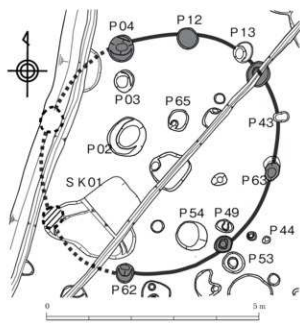
調査区遠景（南西から）



調査区南側完掘状況（北東から）



石跡出土状況（南から）



平地式建物遺構図

水白^{みしろ}モンシヨ遺跡、小竹^{おだけ}ボウダ南遺跡、小竹^{おだけ}スナダ遺跡

所在地 鹿島郡中能登町水白、小竹地内 調査期間 平成23年4月13日～同年5月31日
調査面積 720㎡（水白モンシヨ遺跡280㎡、小竹ボウダ南遺跡320㎡、小竹スナダ遺跡120㎡）
調査担当 澤辺 利明 荒川真希子



遺跡位置図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

- ① 水白モンシヨ遺跡では、中世前期の井戸、建物、溝等を確認した。
- ② 小竹ボウダ南遺跡では、弥生時代中期後半の柱穴を5～7点確認した。
- ③ 小竹スナダ遺跡では、中世土坑、掘立柱建物柱穴を確認した。

これら三遺跡は、能登半島の基部にあたる鹿島郡中能登町水白、小竹地内に所在している。中能登町には、七尾湾から南北に延びる邑知潟地溝帯の平野部がある。平野部は石動山系から流れ出した中小河川によって形成された扇状地がいくつも連なって成り立っている。調査地は、小竹川や井田川によって形成された小扇状地の扇端部に位置している。周辺では、東の石動山系と西の眉丈山系の丘陵部、丘陵端に沿って遺跡が展開している。また、本遺跡に接する鹿島バイパス建設に際しても発掘が行われている。今回の発掘調査は、県営ほ場整備事業（滝尾南部地区）を原因とするものである。

調査の結果、水白モンシヨ遺跡では平安前期の井戸1基、中世の掘立柱建物数棟、古墳～中世の遺物を伴う溝を確認した。調査区北西から確認した井戸は、一辺がおよそ70cm程度の正方形の井戸で、内側枠に横板、外側枠に縦板を組んであり、更に内枠、外枠の間を詰める縦板も確認できた。この井戸の掘方内からは墨書土器2点が出土し、それぞれ文字は「真」と「厨」と判読される。この遺跡は、比較的遺構、遺物が集中している。

小竹ボウダ南遺跡では、弥生時代中期後半の集落跡を確認した。柱穴は5基程度あり、それらの中には柱根を残すものもあった。柱穴には弥生時代の平地式建物と思われる柱穴も含まれている。遺跡周辺は度重なる増水・洪水等に遭っている事が考えられるが、この弥生集落は比較的水害が少ない所に作られていると考えられる。

小竹スナダ遺跡では、中世後半の土坑、掘立柱建物の柱穴を数基確認したのみで、遺物、遺構は希薄だった事から、調査地点は集落の縁辺部と考えられる。現地形からみて集落は、調査地点から南側に展開したものと考えられる。

邑知潟地溝帯中央部の遺跡は一見疎に見えるが、まだまだ全容は明らかではない。この三遺跡も含めて、今後調査検討していきたい。

(荒川 真希子)



遺構集中部（水白モンショ遺跡：南から）



井戸（水白モンショ遺跡：西から）



全景（小竹ボウダ南遺跡：北西から）



全景 遺跡中央部（小竹ボウダ南遺跡：北西から）



建物出土状況（小竹ボウダ南遺跡：南東から）



作業状況（小竹ボウダ南遺跡：南東から）



全景（小竹スナダ遺跡：北西から）



全景 遺跡中央部（小竹スナダ遺跡：北西から）

畝田 C 遺跡、畝田・無量寺遺跡

畝田 C 遺跡

所在地 金沢市畝田中ほか地内

調査面積 1,240㎡

調査期間 平成23年5月31日～同年7月29日

調査担当 布尾和史 木原伊織

畝田・無量寺遺跡

所在地 金沢市無量寺町地内

調査面積 590㎡

調査期間 平成23年4月15日～平成23年6月8日

調査担当 林 大智 木原伊織



遺跡位置図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

- ・遺跡は大野川河口付近から1 km ほど内陸の沖積地に立地する。調査地は国道305号（海側幹線）の本線部分に位置する。
- ・畝田 C 遺跡は、調査区が N 区、O 区、P 区の三箇所あり、N 区では弥生時代の埋設土器や中世の溝、P 区では奈良・平安時代の土坑、溝、水田を確認。
- ・畝田・無量寺遺跡は、奈良・平安時代の集落跡を確認。過去の調査区とつながる掘立柱建物や井戸などの遺構を確認。

今回の発掘調査は、両遺跡ともに一般国道305号（海側幹線）の国道改築事業に伴い実施した。畝田 C 遺跡は過去、金沢西部第二土地区画整理事業に伴った発掘調査を平成11年～平成14年まで行っており、今回は畝田 C 遺跡の最南部の3区画（N 区、O 区、P 区）が調査対象となった。

畝田 C 遺跡

N 区では、弥生時代の遺構を確認した。土器の出土した付近の溝などからは遺物が出土せず、溝の時期等の特定はできなかった。N 区北西隅には、耕作に伴う平行に並んだ小溝群が確認された。また西限には江戸以降の遺物を含む落ち込みがあり、遺跡の区切りが確認できた。O 区では、遺構は検出されなかった。P 区では、奈良・平安時代の土坑、溝、水田を確認した。遺物は奈良・平安時代の土師器碗底部が出土したが、それ以外の遺物は細かな須恵器の破片などは見つかった程度だった。奈良・平安時代は隣接する既往の調査区で建物跡等があり、今回、集落の周囲に広がる水田の状況が確認できた。水田は、畦畔や段で区画されており、区画内では人や動物のものと思われる足跡を確認した。

畝田・無量寺遺跡

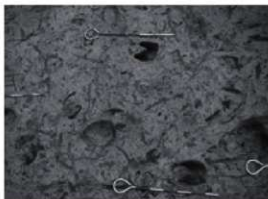
奈良・平安時代の集落跡を確認し、平成12年度発掘調査区とつながる掘立柱建物2棟や井戸などの遺構を検出した。掘立柱建物の柱穴内には礎板が残存しているものも見つかった。また、弥生時代の小穴も検出された。このことから、昭和56年度に金沢市教育委員会が実施した発掘調査でも同時期の遺構が確認されているため、付近に弥生時代の集落跡も展開していたことが確認できた。（木原伊織）



N区 弥生土器出土状況（畝田C）



N区 北西隅小溝群（畝田C）



P区 動物の足跡（畝田C）



P区 畦畔による区画（畝田C）



完掘状況（畝田・無量寺）



井戸完掘状況（畝田・無量寺）



礎板出土状況（畝田・無量寺）



遺物出土状況（畝田・無量寺）

金沢城下町遺跡 (丸の内7番地点)

所在地 金沢市丸の内地区
調査面積 830㎡

調査期間 平成23年4月5日～同年4月28日
調査担当 金山哲哉 安中哲徳 北村啓悟 魚水環



遺跡位置図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

- ・ 金沢城跡の北東を画した白鳥堀に隣接する城下町遺跡であり、近世武家屋敷内の庭園の一部、および中世末～近世初頭の屋敷地区画を確認した。
- ・ 最下面となる第4面の調査を行い、長方形の池状遺構や屋敷地割の区画溝、石組や素掘りの井戸、土坑、礎石建物の根石、掘立柱建物等の遺構を検出した。
- ・ 中世末～近世前半の土師器や陶磁器、石製品、金属製品、銅銭、木製品、漆製品等の遺物が出土した。

一昨年、昨年に引き続いての第3次調査であるが、金沢城下町のうち外惣構の内側区域を「金沢城下町遺跡」と周知化されたため、今年度より遺跡名称が「丸の内7番遺跡」から「金沢城下町遺跡 (丸の内7番地点)」に変更された。

今年度は最下面となる第4面の調査を行い、調査区の白鳥堀側では長方形の池状遺構 (SG112) や素掘りの井戸、土坑等の遺構を検出した。また東側では屋敷地割の区画溝や石組・素掘りの井戸、礎石建物の根石、掘立柱建物等の遺構を検出した。

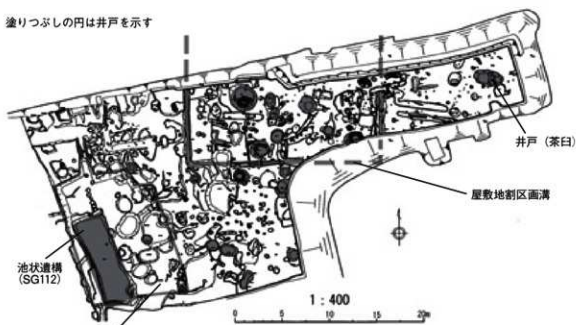
調査区白鳥堀側では、まず白鳥堀から東へ向かって緩やかに下る地山斜面を、大きく長方形に掘り込んだ区画が見られる。北西～南東方向に長軸をとり、約15×10m大である。地山までの深さは西側最大で約90cm、東側で約40cmをとる。昨年度までの調査により、上面で見られた庭園は数度にわたって大規模な改修を受けている可能性が指摘されているが、その影響が排水溝や階段状の掘り込み等に見られる。SG112は区画内南西部の、区画底面から更に一段掘り下がる遺構である。区画と同方向に長軸をとり、約10×3mで、深さは約50cmである。SG112の下位層からは漆器や刀の鏝の断片、下駄等の遺物が出土している。SG112の東側には、粘土採掘坑もしくは廃棄用の大型土坑が重複して確認されている。近世前半の遺構の一部であると思われる。

また、調査区東側の屋敷地割区画溝は東西 (南北) 方向に軸がほぼ一致しており、検出された範囲では一辺が約20mと推測される。昨年度の調査で、検出面より上面では、焼土層の広がりがおおむね同位層で確認されており、中世末～近世初期にかけて、火災等に伴う屋敷地区画の整備が複数回想定される。区画内外では直径2m前後の井戸が石組・素掘りともに検出されており、直径3mと大型の石組井戸も見られる。調査区東側は中世末期の遺構を含み、中世末～近世初頭にかけての屋敷地と、近世前半には区画割を変更した武家屋敷の存在が考えられる。

遺物は土師器や陶磁器の他、^{ヒトシガ}人形等の木製品、釘・刀の鏝等の金属器、漆椀等が出土し、また調査区東端の井戸から茶臼が出土している。

「寛文七年金沢園」等によれば、調査区範囲は公事場に隣接する武家屋敷地であり、岡嶋備中 (当時の公事場奉行、岡嶋兵庫一宗か) の名がみえる。江戸時代初期の前田家重臣の名であり、城に近接する区域として重要視されていたことが見てとれる。今回の調査成果は、加賀藩、遡っては金沢御堂の時期の町場の様相をも物語る貴重な資料であり、今後の研究に一層の期待がかかる。(魚水 環)

塗りつぶしの円は井戸を示す



調査区白鳥堀側掘り込み区画

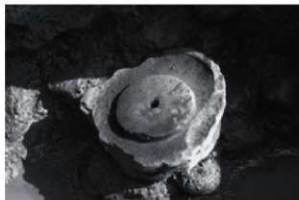
第4面調査区平面図 (S=1/400)



調査区白鳥堀側：池状遺構等 (南から)



調査区東側：区画溝・井戸等 (北西から)



調査区東側：井戸出土遺物 (茶白) (南から)



調査区中央：屋敷地割区画溝 (南から)

額新町遺跡

所在地 金沢市額新町1丁目地内
調査面積 1,080㎡

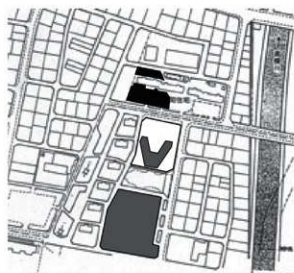
調査期間 平成23年5月9日～同年7月5日
調査担当 和田龍介 畑山智史



遺跡位置図 (S=1/25,000)

遺跡が損壊する部分(南調査区)と、北側の地盤切り下げによって損壊する部分(北調査区)を対象に調査した。

調査では、平安時代の掘立柱建物1棟、小穴等を検出した。調査区内では北寄りになるほど基盤層の下層にあたる礫層が部分的に露頭し、礫原の範囲が広がる傾向を見せており、特に北調査区はほぼ礫原で占められている。掘立柱建物は調査区の南東端で検出され、2×2間の総柱建物となる。建物の北・西・東列は柱穴の伸びは確認できなかつた。柱穴は径約0.5mの略円形を呈し、建物規模は東西3.6m・南北4.2mである。建物軸は南北方向で東に7度振れる。遺物は少量の土師器・須恵器片の出土にとどまる。遺物包含層からは縄文時代の打製石斧が出土しており、額新町遺跡の北側に位置する、周知の縄文時代遺跡である馬替遺跡との関連性が注目される。



■ 今回調査
■ 過去の調査(金沢市実施)

調査区位置図 (S=1/4,000)

調査成果の要点

- ・ 古代の集落跡を確認した
- ・ 9世紀の掘立柱建物を確認した

額新町遺跡は金沢市の南方、額新町1丁目から2丁目にかけて所在する。調査は、額県営住宅建て替え工事に係る公営住宅建設事業を原因として実施した。過去に金沢市教育委員会によって、市営住宅建て替えに伴う発掘調査が2度実施されており(下図灰塗り範囲)、今回の調査(下図黒塗り範囲)は額新町遺跡としては3度目の調査となる。

調査範囲は現住宅の南側の、建物建設によって遺跡が損壊する部分(南調査区)と、北側の地盤切り下げによって損壊する部分(北調査区)を対象に調査した。調査では、平安時代の掘立柱建物1棟、小穴等を検出した。調査区内では北寄りになるほど基盤層の下層にあたる礫層が部分的に露頭し、礫原の範囲が広がる傾向を見せており、特に北調査区はほぼ礫原で占められている。掘立柱建物は調査区の南東端で検出され、2×2間の総柱建物となる。建物の北・西・東列は柱穴の伸びは確認できなかつた。柱穴は径約0.5mの略円形を呈し、建物規模は東西3.6m・南北4.2mである。建物軸は南北方向で東に7度振れる。遺物は少量の土師器・須恵器片の出土にとどまる。遺物包含層からは縄文時代の打製石斧が出土しており、額新町遺跡の北側に位置する、周知の縄文時代遺跡である馬替遺跡との関連性が注目される。

今回の調査範囲は、遺構・遺物ともに希薄な状況であり、額新町遺跡の北縁辺部に相当すると考えられる。既往の調査で確認された弥生・古墳時代の遺構・遺物も本調査では確認できず、遺跡の中心は南側に拡がっているものと考えられる。

(和田 龍介)



調査区全景（黒実線が調査範囲）



掘立柱建物（北から）

ながい町 ながいふるやま
長池カチジリ遺跡、横江古屋敷遺跡

所在地 野々市市長池地内 調査期間 平成23年5月30日～同年7月27日
 調査面積 1,440㎡（長池カチジリ遺跡：560㎡、横江古屋敷遺跡：880㎡）
 調査担当 北川晴夫 白田義彦 荒川真希子



1横江古屋敷遺跡 2長池カチジリ遺跡
 遺跡位置図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

長池カチジリ遺跡

- ・手取川扇状地扇尖部に位置する弥生時代後期～終末期の集落跡。
- ・弥生時代後期～終末期の掘立柱建物2棟、小型の堅穴を検出した。
- ・旧安原川の流路を検出した。

横江古屋敷遺跡

- ・弥生時代後期～終末期の集落跡。
- ・弥生時代後期～終末期の土坑、溝を検出した。
- ・旧安原川の流路を検出した。

長池カチジリ遺跡と横江古屋敷遺跡は手取川扇状地扇尖部に立地し、野々市市の西北部、JR野々市駅の西側に所在する。今回の調査は手取川水系の七ヶ用水のうちの郷用水である安原川の河川改修工事に伴うものであり、横江古屋敷遺跡と長池カチジリ遺跡は隣あっている。両遺跡は共に弥生時代後期～終末を中心とする遺跡であり、一連の遺跡と把握できよう。長池カチジリ遺跡は横江古屋敷遺跡の約50m北側に位置し、両遺跡共に調査区の幅は広い所で約20mであり、安原川東岸に隣接する。

長池カチジリ遺跡

長池カチジリ遺跡の主な遺構は、弥生時代後期の掘立柱建物2棟、小型の堅穴1棟、旧安原川の流路などである。掘立柱建物は1間×3間 (SB1、385×610cm、N-29°-W)、1間×2間 (SB2、370×425cm、N-31°-W)の規模を測り、柱穴に木柱は残っていなかった。SB1の柱穴の深さは浅いもので20cm、深いもので55cmであり、SB2の柱穴の深さは浅いもので22cm、深いもので31cmであった。小型の堅穴は245×365cm、深さ約10cmを測るものであり、埋土からは弥生時代後半の土器が出土した。堅穴の主軸方位はN-10°-Wであり、弥生時代の掘立柱建物方位と異なる。

平成21年度に本調査区の南側約150mの所で長池ニシタンゴ遺跡の調査が行われ、弥生時代終末期を中心とする堅穴建物が2棟確認されている。これら遺跡間の関連性が注目される。

横江古屋敷遺跡

横江古屋敷遺跡の主な遺構は弥生時代後期～終末の土坑・溝、旧安原川の流路などである。

本遺跡は松任市(現白山市)教育委員会、石川県立埋蔵文化財センターによって安原川の西側で以前に調査が行われており、遺構の変遷がまとめられている。それによると、弥生時代中期後半から遺構がみられ、後期の法仏式段階から月形式段階にかけて最盛期を迎え、古墳時代初頭の白江式段階に至り集落は終息し、古墳が出現するという変遷が考えられている。

今回の調査区では直線的にのびる幅約40cmの弥生時代の溝 (SD1)を確認しており、上記の調査成果を鑑みると、本調査区は住居域に隣接する農業生産域にあたる可能性がある。(白田 義彦)



長池カチジリ遺跡完掘状況（南から）



横江古屋敷遺跡完掘状況（南から）



長池カチジリ遺跡の小型竪穴と掘立柱建物（東から）



横江古屋敷遺跡のSD1完掘状況（北から）

よねなが 米永ナデソオ遺跡

所在地 白山市米永町地内

調査期間 平成23年4月15日～同年6月9日

調査面積 950㎡

調査担当 河合秀樹 山川史子



遺跡位置図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

- ・平安時代後期の集落跡である。
- ・調査区は、西側に中心がある集落の縁辺部と思われる。
- ・掘立柱建物3棟、畝溝状の遺構、小穴、江戸時代の溝や河道などの遺構を検出した。

米永ナデソオ遺跡は、白山を源流とする手取川によって形成された扇状地の扇端部寄りに位置する。調査は北陸新幹線建設工事に係るもので、平成22・23年度の2カ年にわたって行われている。調査区はJR北陸線の名出層踏切の脇

に位置する。

前年度調査で、平安時代後期の集落跡が確認され、複数の掘立柱建物や井戸、溝、小穴などの遺構を検出した。今年度調査区は前年度調査区の東隣接地に当たり、井戸がなく、耕作地と考えられる部分があることから、昨年度調査区側に中心がある集落の縁辺部分かと思われる。遺構は、調査区東側と南側に掘立柱建物3棟を検出し、調査区北端から東端にかけては近世以降の溝や川を確認した。北西部には畝溝状の遺構を検出した。遺物は、東側の建物の柱穴から12世紀前半の土師器や白磁が出土し、集落の時期を示す。ほかに東北端の河道から18世紀の陶磁器が出土した。掘立柱建物は、南側に1棟(2間×3間)、中央あたりに1棟(2間×2間で西側に庇付き)、北側東部に1棟(2間×4間?)を確認した。なお、南側建物と北側西部の建物は、昨年度調査区で検出している建物につながっていることが確認できた。このほか、溝から須恵器・青磁や鉄滓が出土した。

(河合 秀樹)



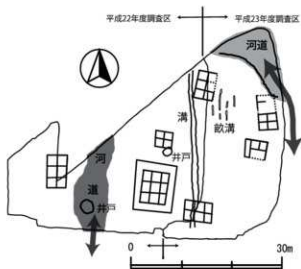
遺跡遠景 (南から)



調査区位置図 (S=1/5,000)



畝溝状遺構（南から）



調査区略図 (S=1/750)



南側掘立柱建物（南から）



北側東部掘立柱建物（南から）



ビットから出土した土師器



北端から東端にかけての河道（南東から）

平成23年度上半期の遺物整理作業

国関係グループ

上半期の整理作業内容としては、宮保B遺跡・宮保館跡（白山市、平成22年度調査）、七尾城跡（七尾市、平成21年度調査）、大泊A遺跡（七尾市、平成21年度調査）の整理作業と、下半期へ続く道村B遺跡（白山市、平成22年度調査）の記名・分類・接合の作業を行った。

宮保B遺跡・宮保館跡では、龍泉窯を主とする劃花文や鎗蓮弁文などの青磁碗が数点見られた。殆どが口縁部の小さい破片で、表面では釉の厚さで見えにくい文様も、断面を見れば刃を入れた凹凸が見られる為、わずかな凹凸も確認出来るマイクロスコープで断面を映し観察、線が細かいので、実測時はいかに鉛筆1本1本をくつつかずに図化するか目を凝らしての細かい実測となった。他に、櫛目鎗蓮弁と劃花文が細工された碗や、双魚文が押された皿などが出土していた。珍しい物としては、鉄釉のかかった瀬戸の梅瓶があり、高級感を漂わせる整理作業となった。木製品は大量の箸や、加工痕が表裏に見える約2メートルもある大きな板が出土しており、原寸実測も困難な為、糸を張って目安とし計算を必要とする縮小実測を余儀なくされた。石製品は煤の付いた石が多くみられ、カマドの可能性のある大きな石製品や、五輪塔も出土している。

七尾城跡は、灯明皿や播鉢などの陶磁器類の他、注目すべき中国製と思われる円面硯が出土しており、裏面には文字が刻まれていた。3分の1ほどの破片しか無く彫りも浅い為、全体的解読は困難だが「申」、「生」、「文」等の文字が刻まれている。遺構図トレースは石組された井戸枠が確認されており、細かい石組のトレースが主となった。

大泊A遺跡は製塩遺跡である為、製塩土器が多く出土されている。殆どが小さい破片の為、口縁から底部までの接合はなかなか難しく、大量の小さい破片から正確な形状が解る接合は困難を極め



木器実測（宮保B遺跡）



石器実測（宮保B遺跡）



土器接合（大泊A遺跡）

た。平底の製塩土器は少なく、尖底の製塩土器が多数出土されており、おおよその形状が解る土器として口縁が広く胴部は細めの棒状尖底が見られた。その他、口縁から底部まで破片があり完形に近い状態で復元出来る須恵器の大甕や、赤彩のかかる高坏や首の長い瓶も出土しているが、やはり遺跡の印象としては製塩土器が強く残る整理作業になった。(中尾望穂)

県関係調査グループ

上半期は、小立野ユミノマチ遺跡（金沢市・平成22年度調査）の記名・分類・接合から始まり上半期前半のほとんどを費やす中心となる整理作業となった。江戸時代の武家地らしく、土師皿、行火のほか底部に墨書やへら記号の見られる火鉢も小型から大型のものまで数多く、陶磁器では17世紀後半～19世紀頃の肥前や瀬戸・美濃が多く見られた。碗、皿、土瓶、徳利、猪口、仏飯器、紅猪口、水滴など、刷毛目唐津や染付が多く、実測・トレース共に集中力、時間を要した。他には硯、砥石、土人形、金属では煙管などの実測を行った。続いて加茂遺跡（かほく市・平成16年度調査）の木器の実測・トレースに入った。柱根と杭は樹皮の付いたものが多く、他に板状のものや墨書の本筒もあった。次に松任城跡（白山市・平成21年度調査）、道村B遺跡（白山市・平成22年度調査）の遺物整理作業を行った。道村B遺跡については、記名・分類・接合作業がほとんどを占めて下半期へ移ったため次号に掲載する予定である。

(山口 桂)

上半期の遺物洗浄は、平成22年度に発掘調査した北陸新幹線関連工事に伴う7遺跡を全般的に行い、期末に今年度現地調査を終えた3遺跡の作業を実施した。なかでも数量が多かったのが、道村B遺跡（白山市）で、全体の6割程度の作業量を占めた。

(土屋宣雄)



カゴのトレース（加茂遺跡）



記名・分類・接合（小立野ユミノマチ遺跡）



土器トレース（小立野ユミノマチ遺跡）

特定事業グループ

上半期は、神田遺跡（金沢市・平成22年度調査）、北安田南遺跡（白山市・平成22年度調査）、高見遺跡（白山市・平成21年度調査）、小立野ユミノマチ遺跡（金沢市・平成22年度調査）の整理作業を行った。

神田遺跡と北安田南遺跡は弥生土器、土師器、須恵器、石製品の記名・分類・接合および実測・トレースを行った。

高見遺跡は弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、石製品の記名・分類・接合および実測・トレース、木製品、金属製品、銭の実測・トレースを行った。

小立野ユミノマチ遺跡は陶磁器、土師器、瓦、石製品、土製品の記名・分類・接合および実測・トレース、金属製品および銭の実測・トレースを行った。小立野ユミノマチ遺跡は江戸時代の絵図によると、加賀藩重臣横山家の下屋敷や藩の持弓組の足軽屋敷が置かれていた一角にあたりとみられているだけに、陶磁器をはじめ灯明皿、暖をとるための火鉢や焜籠^{カマド}などが多く出土した。接合するとほぼ完形という遺物が多く、なかでもかまどは調整痕や焦げがはっきりと残り、大きいうえに七面実測という大作になった。また、再興九谷の磁器は繊細緻密な筆使いで彩色や絵柄が描いてあり、その美しさを実測図とトレース図に写し取るには、根気強い計測と作者に負けないほどの繊細さを必要とした。（西川朗聖）



かまど実測（小立野ユミノマチ遺跡）



土器接合（小立野ユミノマチ遺跡）



記名・分類・接合（小立野ユミノマチ遺跡）

環日本海文化交流史研究集会の記録

はじめに

(財)石川県埋蔵文化財センター所長 三浦 純夫

環日本海文化交流史研究集会は、日本海に面した石川県の歴史的特質を明らかにするため、日本海沿岸域に共通するテーマを選んで沿岸各地域と調査・研究を行い、交流をはかるものである。研究集会は、財団法人石川県埋蔵文化財センターが平成12年度から「環日本海文化交流調査研究事業」の一環として実施しており、今年度が12回目の開催となった。

今年度のテーマは「中世日本海域の墓標－その出現と展開－」である。このテーマを選定した理由のひとつは、石川県珠洲市野々江本江寺遺跡における木製笠塔婆と板碑の発見にある。11世紀末から12世紀の製作と見られるこの資料は、笠塔婆・板碑の出現について大きな問題を投じており、各地域の出現時期や展開の様相を明らかにすることが必要と感じたからである。

集会では、はじめに野々江本江寺遺跡の木製笠塔婆・板碑について報告があり、ついで九州、山陰、北陸（福井県・石川県・富山県・新潟県）、東北の地域ごとに木製・石製塔婆の様相が報告された。木製に限れば、九州では佐賀県神埼市城原三本谷南遺跡で12世紀の小型卒塔婆の存在が報告され、山陰では、米子市吉谷亀尾前遺跡の大型板碑が報告された。福井・富山・新潟の各県や東北では12世紀代の木製塔婆の例はないが、長野県千曲市八幡社宮司遺跡の六角宝輪が、性格は異なるものの、12世紀の木製資料として注目された。

今回の集会で資料の集成・報告にあたられた、伊藤雅文、中島恒次郎、中森祥、赤澤徳明、安中哲徳、鳥田美佐子、水澤幸一、山口博之の各氏に感謝申しあげたい。

環日本海文化交流史研究集会の開催記録

年度	開催日	内 容
H12	H13. 2. 23	環日本海交流史の現状と課題
H13	H14. 2. 22	鉄器の導入と社会の変化
H14	H15. 2. 21	玉をめぐる交流
H15	H15. 10. 24	縄文後・晩期の低湿地集落－生業の視点で考える－
H16	H16. 10. 29	古代日本海域の港と交流
H17	H17. 10. 28	中世日本海域の土器・陶磁器流通－甕・壺・播鉢を中心に－
H18	H18. 10. 27	縄文時代の装身具－漆製品・石製品を中心に－
H19	H19. 10. 26	日本海域における古代の祭祀－木製祭祀具を中心として－
H20	H20. 10. 24	弥生時代の家と村
H21	H21. 10. 23	日本海域の土器製塩－その系譜と伝播を探る－
H22	H22. 10. 29	近世日本海域の陶磁器流通－肥前陶磁から探る－
H23	H23. 10. 28	中世日本海域の墓標－その出現と展開－

すずしののえほんこうじ
珠洲市野々江本江寺遺跡出土木製塔婆類について

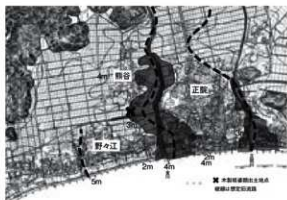
伊藤 雅文（財団法人石川県埋蔵文化財センター）

はじめに：野々江本江寺遺跡は、石川県珠洲市野々江町・熊野町に所在し、金川が作る沖積平野の標高2～4mに位置する。発掘調査は平成18・19年度に実施し、19年度の調査区から木製板碑1基、木製笠塔婆2基が出土した。これらの放射性炭素同位体年代で11世紀中ごろの年代が測定され、上限年代である。珠洲焼の年代も概ね12世紀中ごろ以降となっていることから、平安時代末から鎌倉時代に作られた「餓鬼草紙」などに描かれた木製塔婆の実在を明らかにする。

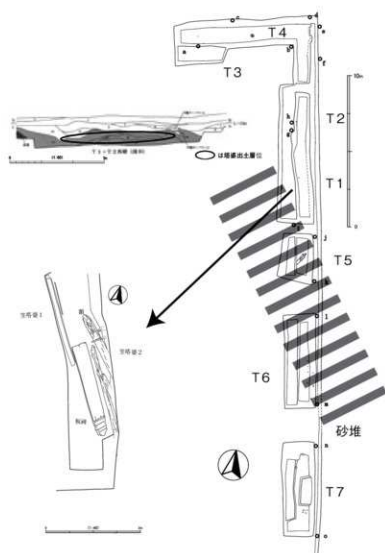
出土：木製塔婆類の出土地点は金川の蛇行部分にあたり、低湿な地勢である。狭長なトレンチ調査により、地形の把握は困難だが、推定幅約4.5m、推定高約0.5mの砂土を中心とした高まりが、北西—南東方向に存在する（砂堆と仮称）。

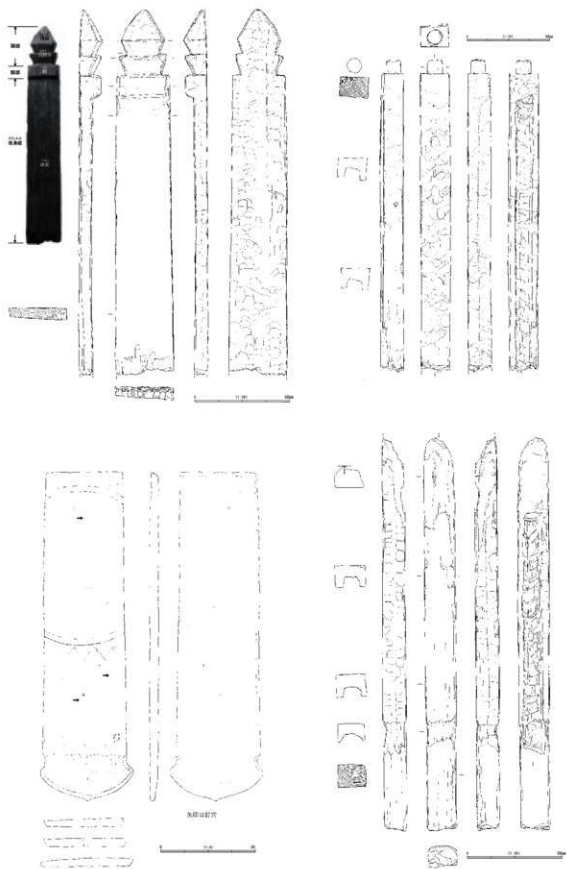
木製塔婆類はこの砂堆の西に接し、笠塔婆1が額を東に向け、板碑を上に向けて基部を接する状況で出土し、さらに笠塔婆2が東接する。これらはほぼ水平状態で出土しており、意図的な埋置である。特に、笠塔婆1の額は竿幅と同じくするように両側が鋭利な刃物で切断されており、有機物で緊縛されていたと推定している。出土地点は他にも木製品が出土していることから、不用物の廃棄場所となっていたと思われる。

木製塔婆：木製板碑1基、木製笠塔婆2基でそのうちの1基に額が付属していた。発掘調査報告書の考察で時枝務氏が論じたように、塔婆の木製品ではなく木製の



野々江本江寺遺跡周辺地形復元 (S=1/30,000)





木製板片部分名称と実測図 (S=1/10)

塔婆であり、石製塔婆のプロトタイプでもある。このため、「木製」の文字を省略する。

板碑：長193cm、幅23～30.5cmで、ヒノキ材から作られている。最外年輪の年代がAMSによる放射性炭素年代測定で1041～1066年と定められた。頭部から額部にかけて二段羽刻み状に造形され、下端は切断されている。

笠塔婆竿部：長2m前後、幅15～18cm、厚11～13cmで、スギ材である。背面に幅約10cmの溝状の影込みがあり、上端に笠に結合するためのホゾがある。1本には樹立による腐朽痕がある。年代測定では竿1が1032～1048年、竿2が1054～1047年および1123～1141年となった。

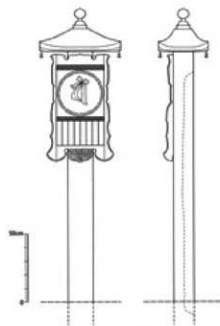
笠塔婆額部：長69.5cm、幅約17cmでアスナロ材で、両側が切断されている。円相内に「バン」が浅く掘り込まれ、黒く彩色されていたようだ。その下の区画には文字痕があり「得」のみ判読できた。竿とは鉄釘で緊結された。右図は、報告書における狭川真一氏の想定復元である。

同時に出土した竿状木製品（クリ材）の年代は1025～1047年、1114～1121年である一方、これらよりも少し上にある木材では13世紀前から中頃であるように、塔婆類との年代的な開きは100年以上となり不自然である。塔婆類のサンプル採取位置が現状で最外縁にあるが、その外に数十年分の年輪の存在が予想されるほか、笠塔婆竿が建築材の転用の可能性も想定されることより、概ね12世紀代に造立されたと考えられる。ただし、11世紀代まで遡上の可能性を否定しない。

まとめ：板碑が高価なヒノキ材から作られ都からの搬入品であろう。一方笠塔婆は地元用材で作られ、塔婆造立の思想が都から地方に移入されたものである。

調査地点からこれらの造立場所を知る手掛かりはないが、屋敷墓の可能性はないが、狭川氏は報告書で付近に寺および墓地の存在を想定している。

奥能登である珠洲地域では、康治2年(1143)に若山荘が皇嘉門院に寄進され、広大な荘園が成立した。調査地点は若山荘と東に広がる国衙正院領との境界に位置する。赤坂憲雄氏による境界は「点」として存在し(「境界の発生」2002)、窪田涼子氏はパブリックと表現する(「描かれた塔婆」1995)。境界における廃棄・祭祀行為としても認識できよう。



笠塔婆想定復元図

西暦	1000	1100	1200
木製板碑		■	
木製笠塔婆-1	■		
木製笠塔婆-2		■	
竿状木製品	■	■	
上部自然遺物			■
珠洲陶器			■

出土遺物の年代整理



若山荘領域

中世日本海域の墓標 その出現と展開－九州－

中島恒次郎（太宰府市教育委員会）

はじめに

石川県珠洲市野々江本江寺遺跡から出土した木製卒塔婆の社会的位置について、その帰属時期が平安時代後期（12世紀後半）である点、さらにその機能について九州から東北までの事例について議論が交わされた。

卒塔婆の機能については、多くの学説史が説くように、聖者の遺骨（仏舍利）や遺品を納めた土盛りを基調とする塔に起源を発するとされ、インド・サンチーのストゥーパ第1塔が引き合いに出される。その後中国・韓国・日本へと伝来し、「塔婆」「塔」として伝わってきたとされる。日本における「塔」字最古の記述は、『日本書紀』敏達天皇十四（585）年二月条に記される「塔」が知られており、その後の意味変容過程において、①供養具としての卒塔婆、②墓標としての卒塔婆、③境界に建つ卒塔婆の三種が、文献史料、絵画資料から読み取ることができている。いわば、供養→家族などの死者供養としての墓標→不特定多数者の供養と結果の内と外を画す標識へと意味が変容していったことが推測できる。

本研究集会では、野々江本江寺遺跡から出土した大型木製卒塔婆の機能についての議論が中心の課題であった。九州における卒塔婆の出土事例を紹介し、これらの課題に一定の方向性を示したい。

時間・空間変化

九州における卒塔婆出土事例を、表1に示した。これから読み取れるように、木製、石製の卒塔婆の出現時期は、平安後期（12世紀後半代）に求めることができ、野々江本江寺遺跡事例と時間差なく出現している。しかし機能面では、九州における古い事例は、小型の木製卒塔婆であり、供養具としての機能が濃厚な資料である点が異なっている（図1）。また卒塔婆資料の空間的な広がりとすると、出現から約1世紀のズレがあり、鎌倉後期（13世紀後半）以降に増加傾向をみせる。この増加傾向は、いずれも墓標としての卒塔婆であり、被葬者を弔う、追善供養のための標識としての意味が強まっているものと考えられる。

塔婆造立の意味

卒塔婆造立の意味を問うことは、単に卒塔婆のみを見ては理解できないため、平安後期から鎌倉末期を対象として墓制資料を見てみよう。既に別稿にて記述してきた①屋敷墓、②共同墓地、③石塔、④輸入陶磁器埋納率について検討した結果をまとめた表が、表2である（中島、2009）。

この表から見えてくることは、鎌倉期を境として墓制上の変化が「置換」していることが読み取れる。具体的な時間軸は、13世紀後半頃を示している。いわば、本格的な中世的社会が動き始めた時と一致していることが分かる。そこで、2つの項目に分けて考えてみよう。

a. 権力継承を正当化する装置としての塔婆

鎌倉期を様相置換の期間として、葬儀の場で葬儀参加者に対するステータスシンボル表徴のための装置が、同時代生活者でなくても被葬者の階層を知ることができる装置として様々な道具が変容していく様をみることができる。これは、崩れてはいるものの古代的制度の「残映」と中世的な領土制に基づく地域統治制度が共存した時代から、自らの階層的位置を自己主張し、かつ継承しなければならなくなった時代への変化を表現しているものと考えられ、供養具としての卒塔婆が墓標として石造化

していく時代背景をみることができる。

b. 境界に建つ塔婆

供養具としての卒塔婆が、先祖供養のための標識としての卒塔婆へ、そして不特定多数者への境界内外を分かつ標識としての卒塔婆へと時間変化に伴い、意味変容をきたしてきた様を見ることができ。九州内において、近世に集落の内外を分かつ場に「六地藏」が造立されており、まさにこれらが境界に建つ塔婆の事例である。考古事象上、これがどこまで遡るのか、境界に建つ不特定多数者を供養する卒塔婆を見出すことはできていないが、今後、この視点での抽出を試みてみたい。

おわりに

九州においては、平安後期に供養具として小型の卒塔婆使用が始まり、その後、権力継承権正当化の装置として「朽ちない墓標」である石製卒塔婆が造立されるようになる。今回の研究会の主題である、境界に建つ卒塔婆事例を見いだすことはできなかったが、集落の内と外を画する場に建つ卒塔婆の出現時期ならびに広がりをおうことは、人と物と情報の往来の多さを知る上で重要な素材の一つである。意味の変容の姿とともに、考古事象上類例の探索を行い、これら卒塔婆の存在する社会的位置と意味を問うていきたい。

引用文献

- 神埼町教育委員会（1994）『城原三本谷南遺跡』神埼町文化財調査報告書第56集
 中島恒次郎（2009）『九州の中世墓』『日本の中世墓』狭川真一編 高志書院

表1. 九州における塔婆

塔婆調査番号	遺跡名	遺跡名	時代	形式	備考	所在地	掲載文献	
1	095	大原遺跡遺跡1号	52077(9戸)	平安後期	卒塔婆	平安後期一層墓標の遺跡	佐賀県佐賀市鶴岡町大字八戸遺	1
2	-	城原三本谷南遺跡	52001(39号)	平安後期	卒塔婆	【12世紀後半】 【13世紀前半】	佐賀県神埼町大字城原三本谷	2
3	300	大塚野史跡(國賀遺跡)	79942(30-池原遺跡)	室町期	卒塔婆	【本層塔婆ではないと思われる】	福岡県大塚野町府前番倉4丁目	3
4	299	大塚野史跡(國賀遺跡)	4052(100-池原遺跡)	室町期	卒塔婆	【227号】 【1310年から室賀高層】	福岡県大塚野町府前番倉4丁目	3
5	201	大塚野史跡(國賀遺跡)	109・111(102)100	室町期	卒塔婆	高層二(1304)年築卒塔婆	福岡県大塚野町府前番倉4丁目	3
6	130	井原野遺跡	25814(池原遺跡)	室町期	卒塔婆	高層五(1444)年築卒塔婆	福岡県福岡市博多区井原野2丁目	4

■福岡県遺跡一覧【九州 平安後期一層墓標 紀年記載史料】

塔婆調査番号	遺跡名	遺跡名	時代	形式	備考	所在地	掲載文献
1	藤原宮史跡(藤原宮)		平安後期	三層塔	城元二(979)年二月十七日建立	福岡県武吉野町藤原宮	5
2	本末寺史跡		平安末期	三層塔	聖武天皇(175)聖武天皇	熊本県熊本県基町4丁目	6
3	門台今野史跡		鎌倉期	塔婆	鎌倉元(1193)・鎌倉五(1290)年 期から門台今野史跡の墓標と見られる。	熊本県熊本県基町4丁目	6
4	宮原寺史跡		鎌倉期	塔婆	仁壽院(1245)・文永五(1290)年	大分県豊後高田市中津町	7
5	藤原寺史跡		鎌倉期	塔婆	文永五(1290)年	大分県豊後高田市中津町	7
6	藤原寺史跡		鎌倉期	塔婆	文永五(1290)年	熊本県基町番倉本町遺跡	7
7	中尾寺史跡		平安末期	五層塔	藤原二(1170)・承安一(1170)年	大分県中津市中尾寺遺	7
8	小川寺史跡		鎌倉期	五層塔	寛政四(1822)年	宮崎県宮崎市中尾寺	7
9	西宮寺史跡		鎌倉期	五層塔	文永五(1290)年	熊本県五ヶ野町史跡	7
10	長尾寺史跡		鎌倉期	五層塔	弘治五(1535)年	大分県中津市中尾寺	7
11	長尾寺史跡		鎌倉期	五層塔	藤原二(1170)年	熊本県基町番倉本町遺跡	7
12	長尾寺史跡		鎌倉期	五層塔	弘安八(1285)年	宮崎県宮崎市中尾寺	7
13	大久保寺史跡		鎌倉期	五層塔	弘安八(1285)年	大分県中津市中尾寺	7
14	西宮寺史跡		鎌倉期	五層塔	弘安八(1285)年	熊本県基町番倉本町遺跡	7
15	西宮寺史跡		鎌倉期	五層塔	弘安八(1285)年	宮崎県宮崎市中尾寺	7
16	西宮寺史跡		鎌倉期	五層塔	弘安八(1285)年	大分県中津市中尾寺	7
17	西宮寺史跡		鎌倉期	五層塔	弘安八(1285)年	熊本県基町番倉本町遺跡	7
18	西宮寺史跡		鎌倉期	五層塔	弘安八(1285)年	宮崎県宮崎市中尾寺	7
19	西宮寺史跡		鎌倉期	五層塔	弘安八(1285)年	大分県中津市中尾寺	7
20	西宮寺史跡		鎌倉期	五層塔	弘安八(1285)年	熊本県基町番倉本町遺跡	7

掲載文献

- 1 佐賀市教育委員会(1994)『大原遺跡遺跡 1』佐賀市文化財調査報告書第56集
 2 神埼町教育委員会(1994)『城原三本谷南遺跡 神埼町文化財調査報告書第56集
 3 九州歴史資料館(2009)『藤原宮史跡 遺跡調査報告書』
 4 福岡市教育委員会(1985)『九州の史跡』福岡市文化財調査報告書第19集
 5 多田隆雄(1975)『九州の史跡 上巻』(財)日本文化協会

表2. 九州における墓制

	平安中期	平安後期	鎌倉期	室町期
屋敷墓				
共同墓地				
塔婆【木製】				
塔婆【石製】				
土葬				
火葬				
埋納品【陶磁器埋納】				
墳墓堂	●			

⇔
移行

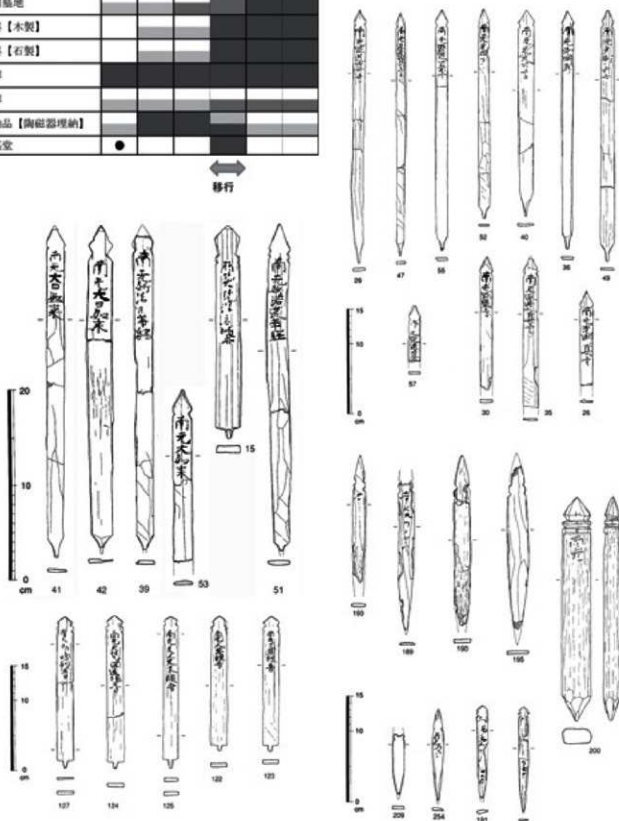


図1. 木製卒塔婆【佐賀県神埼市城原三本谷南遺跡（神埼町教育委員会、1996）】

山陰における中世前期の墓標と墓

中森 祥(鳥取県教育文化財団調査室)

1. 木製塔婆の事例(図1)

山陰両県(鳥取・島根)における出土事例は21件あるが、その分布は出雲(松江市～出雲市)を主体とし、鳥取の事例も島根県境に近い米子市南西部であるため、非常に偏っている。

各木製塔婆の形態を比較すると、大きくは塔婆頭部が五輪塔形のもの(1～4)と山形があり、後者については2段の切り込みをもつもの(5)、および山形の下に横方向の刻線をもつものに分けられる。五輪塔形のものでは4がもっとも小型で、共伴する遺物から平安時代後期のものとされ、もっとも古く位置づけられるが、紀年銘をもつものの最古が大宰府史跡出土例の嘉禄3(1227)年とされており、それよりも相当遡るため検討を要しよう。一方の山形では、6～8、11のように3～4mとなる非常に大型のものがつくられている。山持遺跡例に比べると吉谷亀尾山遺跡(11)例はやや幅が広く、また頭部の山形が低い。この頭部形態は、山持遺跡と西川津遺跡では尖り気味を呈す点で類似している。後者が近世後期の銘が書かれているのに対し、前者は同一層から出土する遺物で最新のものが平安時代とされ、年代測定から13～14世紀に比定されている。このタイプがどのような展開をしていたのか、また吉谷亀尾山例との関係について今後検討が必要であろう。

こうした卒塔婆の立てられた場所について、江戸時代後期のものながらまとまって出土した西川津遺跡をみると、40本ほどの杭状の木が立てられ、そこに塔婆も含まれていた。その位置と明治時代の切り図を照合させた結果、これら杭列が川岸に立てられた状態であったことが判明している。今回紹介した遺物についても、多くが河川や溝などに関連して出土しており、塔婆流しや流水灌頂といった葬送儀礼に伴うものであろう。

2. 五輪塔の導入(図2)

13～14世紀の紀年銘をもつものは13例あるが、その大半が14世紀中頃以降のものであり、その分布は因幡・伯耆から出雲東部、そして石見西部となっており、両者の中間である石見東部から出雲西部には事例がない。この中で最古の銘をもつ倉吉市大日寺文永2年塔のように、古いタイプの五輪塔(2)が伯耆東部ではまとまってみられ、とくに一石五輪塔(4・5)はこの地域以外にあまりみられない。さらに、この地域には赤碓塔(1)と呼ばれる独特な石塔が分布し、特異な地域といえよう。

3. 火葬墓の導入期(図2)

火葬導入の早い段階の事例として、鳥取県では倉吉市打塚遺跡(6)がある。一辺約12mの方墳で12世紀後半に位置づけられる。また、同じく県中部・長瀬高浜遺跡においても、12世紀前葉～中葉にかけての土師器皿を伴う火葬墓が複数基あることから、この段階で火葬が導入されたことは確実である。一方島根県東部では、古代末の事例があるものの本格的な導入は14世紀になってからであり、検出事例としては15世紀以降増加している。その初源的な例は安来市油坪3号墓西御墳裾に位置する石組墓(7)で、この下層に火葬墓を含む土坑が5基、ほぼ一列に並んでいた。また基壇上面から破損した陶製宝篋印塔が2基出土した。

墳墓や石積基壇には火葬骨が散骨されたような事例が多く、さらに五輪塔・宝篋印塔を立てた可能性のあるものがみられ、このような石積基壇(墳墓)・火葬骨・石造物というセットが平安時代終わりから鎌倉時代において成立したことが窺える。

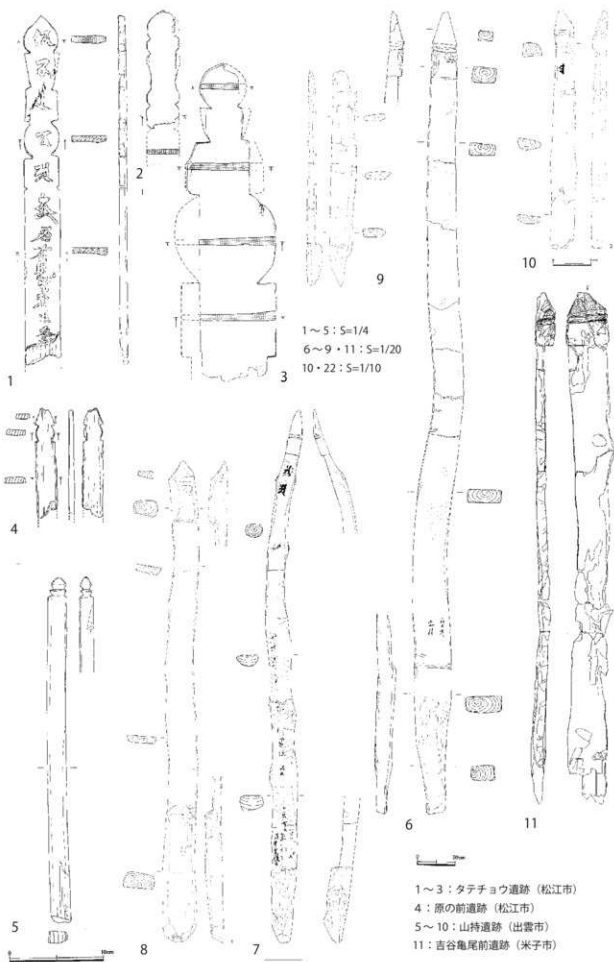


図1 出土木製塔婆



1 赤碓塔 (鳥取県琴浦町)



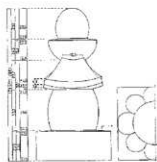
2 大日寺五輪塔
(頼朝墓・倉吉市)



3 助沢五輪塔
(鳥取県江府町)



4 大日寺円地坊
19号塔 (倉吉市)

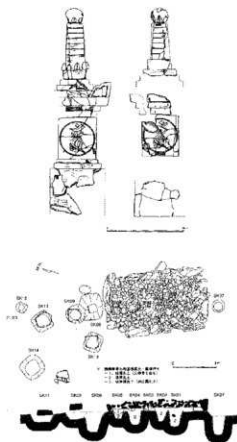


5 広瀬ヒイデ山
五輪塔 (倉吉市)

1~5 : S = 1/30



6 打塚遺跡 (倉吉市)



7 油坪3号古墓 (安来市)

S=1/160

図2 石造物および墳墓・石積基壇

福井県の中世墓標の出現と展開について — 福井県における中世墓の展開と石造物 —

赤澤 徳明（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター）

（1）中世墓の立地について 古代・中世木製祭祀遺物の所在確認に代えて

福井県でこれまで発掘された墓地関連遺跡（寺院や中世墓群など）は丘陵や山腹で木製品が残るような低地部での調査例はないためか、明らかに墓標などの木製遺物は確認されていない。

（2）火葬の始まり

古代末から中世前期にかけてと考えられる火葬地の調査は下河端遺跡（鯖江市）、徳神遺跡（越前市）などがある。しかしこの時期の明らかに火葬墓とされるものはない。これについては集落縁辺部で単独で出土する土師器壺などにその可能性があるのではないかと考えている。その事例として下糸生脇遺跡 HS X01、乗兼・坪江遺跡 SP218の土師器長胴甕の合口、山腰遺跡の土師器長胴甕などがある。

しかし12世紀後半から13世紀にかけて造墓された家久遺跡（越前市）では、石塚内の土葬（木棺の痕跡は未確認）されていることから、鎌倉時代前半でも火葬がどこまで普及していたか疑問である。中世墓と石塔の展開に先行して、火葬遺構の出現が先行する可能性が高い。

（3）中世墓の成立と展開 —福井県内の調査事例から—

発掘調査された中世墓として、次の5つの中世墓群がある。

漆谷中世墓群（福井市）、芳春寺中世墓群（美浜町）、山田中世墓群（おおい町）は方形区画や配石に石造物が伴うのを基本とする。刀などの副葬事例があることから、造営集団は武士階級と想定される。三峰村中世墓群（鯖江市）は方形区画や配石を行わないで石塔のみで構成される。古代から続く三峯寺に隣接することからも、造営集団は宗教関係者と考えられる。坂ノ下中世墓群（敦賀市）は石の方形区画から区画のない石塔のみの墓へ変化することが、調査内容の検討の結果から推測される。事例に限られるので、あくまで仮説であるが、石の方形区画や配石の中世墓は武士階級、石塔のみの中世墓は宗教関係者のものと考えられる。時期的に下ると、武士階級も石塔のみの墓へ変化し、石塔を造立することが下の階層にも広く広まると想定される。

（4）石塔について

①越前最古の石塔と考えられるのは、笏谷石ではなく産地不明の福井市深谷町前山出土凝灰岩質砂岩製宝塔塔身である。笏谷石製では鯖江市中野勢至堂の五輪塔が最古と思われ、加賀市山代薬王院の宝篋印塔（第2図1）もこの直後の時期であろう。また総高が1mにも満たないが、ほぼ同時期と考えられるものが福井県内（第2図3～5）ではもちろん、愛知県でも出土している（第2図2）。若狭では三方町（現在の若狭町）臥竜院墓地にある2基（第2図12・13）が最も古い五輪塔と考えられる。

②鎌倉から南北朝にかけては越前も若狭も、多層塔が多く残り、その後に石造物の主体となる石材でつくられている。特に福井平野周辺には笏谷石の多層塔が多く残されている。若狭では紀年銘はないものの、花崗岩製の美浜町高奈弥神社多層塔が最も古いと考えられる。

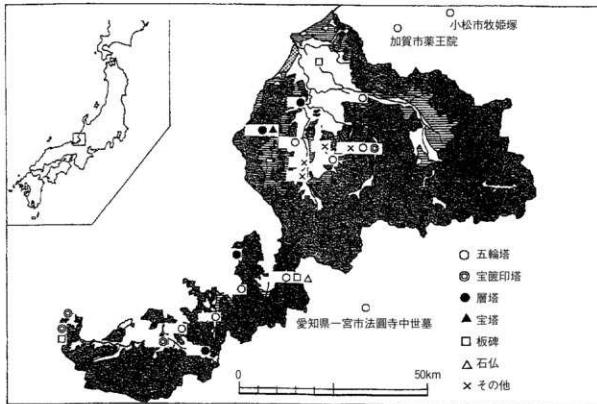
③鎌倉から南北朝にかけて、一部の限られた地域では大型の板碑が集中する地域がある。越前では坂井平野西部（坂井市春江町周辺）＝笏谷石の板碑（井ノ向の白山神社の板碑が代表）、若狭西部の高浜町＝日引石の板碑（西林寺の板碑が代表）のように狭い範囲に特定される。

④福井県内の中世石造物の種類と分布

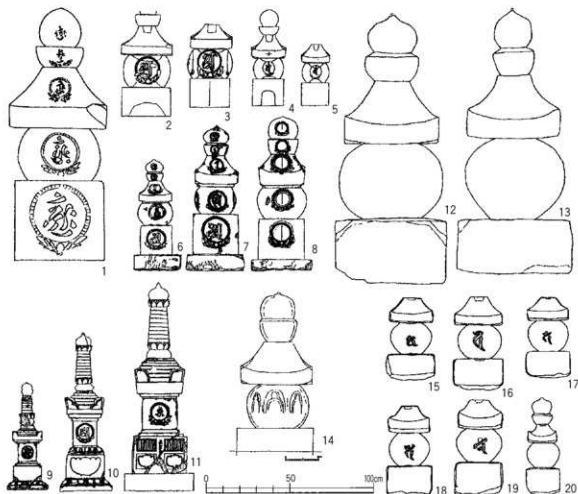
主に福井県を中心とした中世石造物一覧表

名称	所在地	番号	種類	石材	和暦	西暦	時期	時期比定根拠
家久中世墓	越前市	7 ×	覆部墓	—	—	—	鎌倉前期	白磁・カワラケ(12世紀末)、和鏡(13世紀前)、鳥帽子出土
中野勢至堂五輪塔	鯖江市	6 ○	五輪塔	筥谷石	—	—	—	—
井向白山神社板碑	坂井市	1 □	板碑	筥谷石	文永 11	1274	—	—
高雄神社七重塔	坂井市	3 ●	層塔	筥谷石	正応 3	1290	—	—
大谷寺石造九重塔	越前町	10 ●	層塔	筥谷石	元亨 3	1323	—	—
蓮王院五輪塔	加賀市	20 ○	五輪塔	凝灰岩	—	—	—	伝明覚小入(1106年没)の墓
法園寺4号墓五輪塔	愛知郡	22 ○	五輪塔	凝灰岩	—	—	—	13c 前半の美濃四耳壺伴う
朝日山6号墳	越前町	9 ○	五輪塔	凝灰岩	—	—	—	①
臥龍院境内五輪塔	若狭町	14 ○	五輪塔	花崗岩	—	—	—	—
長英寺五輪塔	小浜市	16 ○	五輪塔	花崗岩	—	—	—	大良ノ庄内
高宗弥神社 層塔	美浜町	12 ●	層塔	花崗岩	—	—	—	相輪は後補
牧部塚	小松市	21 ○	五輪塔	花崗岩	—	—	—	14世紀前半?
大谷寺門山宝塔	越前町	10 ▲	宝塔	筥谷石	観応 3	1352	南北朝前期	—
西方寺跡(市)宝篋印塔	小浜市	17 ○	宝篋印塔	花崗岩	延文 3	1358	—	—
正業寺宝篋印塔	高浜町	18 ○	宝篋印塔	目引石	—	—	南北朝前期	—
曹福寺九重塔	若狭町	15 ●	層塔	目引石	応安 4	1371	南北朝後期	応安の国一揆関連か?②
上柳宝篋印塔	高浜町	18 ○	宝篋印塔	目引石	応安 6	1373	—	—
西林寺宝篋印塔	高浜町	19 ○	宝篋印塔	目引石	応安 6	1373	—	—
西林寺板碑	高浜町	19 □	板碑	目引石	応安 7	1374	—	—
西林寺板碑笠塔婆	高浜町	19 □	笠塔婆	目引石	永和 3	1377	—	—
伝徳谷氏五輪塔	若狭町	14 ○	五輪塔	花崗岩	—	—	—	—
坂ノ下中世墓群	敦賀市	11 ○	五輪塔	花崗岩	—	—	—	—
芳春寺山中世墓	美浜町	13 ○	五輪塔	花崗岩	—	—	15~16C 初	—
三峯村墓地跡	鯖江市	4 ×	墓相	—	—	—	13C	—
三峯村墓地跡	鯖江市	4 ○	五輪塔	筥谷石	—	—	14~16C 末	—
三峯村墓地跡	鯖江市	4 ○	宝篋印塔	筥谷石	—	—	14~16C 末	—
下河端道跡	鯖江市	5 ×	火葬道標	—	—	—	—	—
世神道跡	越前市	8 ×	火葬道標	—	—	—	—	—

※①同じようなタイプの筥谷石製五輪塔が13世紀に成立すると考えられる諏訪問興行寺から出土している。
 ※②応安の国一揆とは貞治5年(1366)に若狭の守護となった一色(義光)氏の国人に対する抑圧=半済(新風の税の導入)に対する国人との争い、応安4年(1371)に守護側の勝利で終り、一色氏の若狭支配が安定する。



第1図 福井県を中心とした石塔位置図 (S=1/1000,000)



1. 加賀市薬王院 2. 愛知県一宮市一宮市法興寺中世墓造跡 3～5. 越前朝日山古墳群 6～11. 船江市三峰村跡墓地
12～13. 若狭町臥電院墓地 14. 小松市牧師塚 15～20. 敦賀市坂ノ下中世墓群

第2図 福井県を中心とした凝灰岩（筈谷石）製と花崗岩製・日引石製の主要な石塔（S=1/20）

福井県内の板碑を含む石塔の分布は次のような状況である。

- ・敦賀を除く越前の平野部には筈谷石の五輪塔に少ないが宝篋印塔が展開し、戦国期になると一乗谷周辺の地域に板碑と一石五輪塔が多数存在する。三峰村墓地跡では越前でも類例が少ない宝篋印塔（第2図9～11）が出土し、現存塔が少ない五輪塔もいくつか復元されている（第2図6～8）が、このように遺存状態が良好な石塔群は越前では珍しい。
- ・奥越盆地（大野市と勝山市）では白山平泉寺を除いて中世の石塔はほとんど見る事ができない。
- ・敦賀から若狭東部には花崗岩の五輪塔（第2図15～19）・宝篋印塔・多層塔・石仏と花崗閃緑岩の板碑（坂ノ下中世墓群・芳春寺中世墓群）が中世全般にわたり分布する。16世紀以降に筈谷石の板碑が散見されるのは、朝倉氏に関連する集団のものと考えられる（坂ノ下中世墓群）。
- ・若狭では南北朝期あたりまで花崗岩の五輪塔・宝篋印塔が分布するが、南北朝のころを境に小浜から西側を中心に日引石の宝篋印塔が広範囲に分布するようになる。中世後半（15世紀ぐらいか）からの石塔は、若狭西部ではほとんどが日引石で占められ、若狭東部の美浜町や敦賀まで広がるようになる（第2図20）。
- ・日引石製石塔が西日本各地の広範囲に広がるのは倭寇の活動時期とダブるものとされ（大石一久氏の研究による）、若狭でも東では前代より引き続き花崗岩の石塔の分布が多く、越前では日引石製・花崗岩製の石塔は非常にまれである。

加賀・能登における古代末～中世前半期の墓地と墓標

安中 哲徳（財団法人石川県埋蔵文化財センター）

墓標と記年銘資料 古代～中世にかけての墓の形状は、『餓鬼草紙』に見える高塚で周りに石を積んだ墳丘墓がイメージできるが、実際には墳丘の有無、周溝（区画溝）の有無、配石（集石）・区画石の有無などの各要素と、上に墓標（石塔）、下に蔵骨器や土器棺を持つかどうか、火葬か土葬などが組み合うとともに複雑な状況を示しており、完全には整理できていない状況にある。

古代の墓制については、古代前半に見られた火葬骨を蔵骨器に埋納した土坑墓が輪島市道下元町遺跡や小松市河田山古墳群などで見られるが、火葬はまだ一般化しておらず普及はしていない。

県内の石塔類には、五輪塔や宝篋印塔、板碑、層塔などがあり、本来は供養塔の意味で建てられていたものが、14世紀後半以降、墓標として変化してきたとされている。記年銘を持つ石塔類の中で最古の事例は、羽咋市福水朝日山遺跡の弘安二年（1279）銘を持つ自然石板碑で、13世紀代を中心とする7基の磔を伴う墳丘墓から珠洲焼壺や片口鉢、土師器皿が出土している。福水寺住職の墓とされており、板碑は門弟等が造立したものと考えられている。また、珠洲市法住寺墓地では、元久元年（1204）銘を持つ経筒外容器が出土しており、経塚が造られた後、珠洲焼壺棺墓の土葬墓と珠洲焼の蔵骨器を持つ火葬墓とが混在する集団墓地へ変遷することがわかる。能登町明泉寺鎌倉屋敷の集団墓地内では、永享三年（1431）八月廿七日銘五輪塔地輪が確認されており、塔下から珠洲焼四耳壺の蔵骨器が出土している。周囲に積み直された石塔も多く、五輪塔と蔵骨器の同時性には検討も要すが、珠洲焼福年の基準資料となっている。県内最古の五輪塔には加賀市薬王院塔や能登町最安寺塔が位置づけられ、14世紀前半の造立とされている。

加賀型宝塔 古くから五輪塔の火輪とされてきたものの一群に、頂部に反花装飾を持つ一群があることが知られていたが、能美市宮竹墓谷中世墓群の調査で相輪と一体的に出土したことにより、宝塔の笠であることが明らかとなった。その後、金沢市史編纂による金沢市普正寺遺跡の実測調査により、第3号塔が完形の宝塔に復元されている。形状は、基礎・塔身は五輪塔の地輪・水輪と同一形態であり、単独では判別困難である。笠は頂部に反花装飾を持ち、下方に沈線を巡らせる。反花を伏鉢、沈線を露盤に対比できる相輪は、上から宝珠・水煙・反花・五輪・請花を持ち、笠と組み合わせることによって五輪塔・宝篋印塔と区別することが可能である。石材は、緑灰色を呈する凝灰岩が多く、産出地に小松市南部の滝ヶ原町周辺が、凝灰質砂岩のものは小松市北部丘陵と想定されているものもある。分布は、北は津幡町から南は加賀市までの加賀地方を中心に確認されているが、宝達志水町や富山市での確認例もある。時期は、14世紀後半～15世紀前半を中心に造立されており、時期が降るにつれ反花と沈線の省略化が見られる。また、意図的な破砕行為による廃棄や他に転用される例が、能美市宮竹墓谷中世墓や金沢市額谷遺跡、小松市八里向山H遺跡などで見られる。三浦純夫氏による越前式装飾を持つ宝塔の検討により、これら特徴を持つ宝塔は、円山塔に代表される越前嶺北の宝塔に源流を置き、14世紀第4四半期に出現することが明らかとなっており、今回改めて加賀型宝塔として提示したい。

信仰関連遺物 古代～中世の墓標・信仰関連遺物と考えられる木製品の中で、珠洲市野々江本江寺遺跡出土の大型木製板碑や笠塔婆など全形を復元できる類例は他に見ることができない。

笠塔婆の笠形木製品が金沢市梅田B遺跡や小松市浄水寺跡などから出土し、小松市浄水寺跡からは笠塔婆の宝珠の可能性のある木製品が出土している。

七尾市三室オンド遺跡からは、長野県千曲市社宮司遺跡出土木造六角宝輪に類似する11世紀前半の風招型木製品が出土している。他に、金沢市上荒屋遺跡出土例も風招の可能性はある。

七尾市小島西遺跡では11世紀末～12世紀の卒塔婆が、金沢市豊徳遺跡でも頭部が五輪塔形で、永和元年（1375）銘墨書を持つ卒塔婆が出土しており、柿経写経供養に関連することが明らかとなった。笹塔婆は、中能登町水白モンシヨ遺跡や宝達志水町南吉田葛山遺跡、金沢市堅田B遺跡などから出土している。木製遺物の場合、川跡や溝、鞍部などからの出事事例が多く、墓標として実際に墓で使用されていたか不明であり、意図的な廃棄行為や信仰・祭祀行為などに伴う可能性も考えられる。



墓地と石塔の変遷 加賀 平野部では屋敷墓が12世紀の白山市中村ゴウデン遺跡や13世紀の加賀市三木だいもん遺跡の土葬木棺墓（単独墓）に確認できる。北頭位で北側に副葬品がある点が共通し、領主層クラスの屋敷墓と位置付けられている。白山市白山町遺跡・白山町墳墓遺跡では、13世紀前半の土葬土坑墓・配石墓から、14世紀後半～16世紀前半に造営された方形区画の火葬配石墓へと変遷する。土葬土坑墓上からは五輪塔地輪が現位置を保ち出土している。小松市牧口中世墓地は畿内周辺から搬入された五輪塔を持つ単独の墳丘墓で、下部の切石組石室内に加賀焼壺棺を持つ土葬墓である。

火葬墓は13世紀前半から認められ、能美市湯屋チヨウツカ遺跡や小松市八里向山F遺跡・H遺跡など焼土坑墓や土坑上に盛土した墳丘墓が出現し、蔵骨器に火葬骨を埋納する例も見られるようになる。14世紀に入ると小松市軽海中世墓群や八里向山H遺跡円形や方形の配石墓群が認められ、五輪塔等の石塔が造立されるようになるなど、火葬文化の広がりが見られる。14世紀後半以降、配石墓群は急増し、金沢市普正寺遺跡の五輪塔や宝篋印塔・加賀型宝塔・板碑など石塔類も増加し、追善供養

に伴う造立の増加が確認できる。また、白山市鯉崎遺跡や金沢市額谷遺跡の方形周溝墓・区画溝墓の出現など埋葬形態も多様化する。他に、経塚の周辺に一定期間置いてから火葬墓が造営される例が、能美市宮竹墓谷中世墓群や金沢市小坂1号墳々頂経塚・中世墓地で認められる。

地下式墳、地下式横穴墓は津幡町刈安野々宮遺跡や加賀市敷地天神山遺跡群など15世紀後半以降に見られるが、中世前半には出現していない。僧侶の修行窟や入定窟と考えられている。

能登 経塚の周辺に一定期間置いてから墓地进行する例が珠洲市法住寺墓地で見られ、元久元年(1204)銘を持つ経筒外容器が出土している。14世紀前半～15世紀前半には土葬の甕棺墓の土坑墓から蔵骨器を持つ火葬墓への変遷が想定されており、五輪塔や宝篋印塔などの石塔が集積されている。羽咋市福水朝日山遺跡では、土葬木棺墓上に墳丘墓を造り、隣に県内最古の弘安二年(1279)銘を持つ自然石板碑が置かれている。13世紀～14世紀前半にかけての墳丘墓が隣接して造営されており、焼土坑や蔵骨器、火葬骨が出土していることから、土葬から火葬への変遷が見られる。七尾市細口源田山遺跡では、14世紀後半以降の木棺墓・甕棺墓の土葬墓から15世紀前半以降、配石墓や火葬骨埋納ピットなどの蔵骨器を持つ火葬墓へと変遷し、五輪塔も造立されるようになる。

加賀同様、火葬墓は13世紀代の墳丘墓で出現し、14世紀後半以降、石塔、蔵骨器を持つ配石墓が増加するが、能登では方形周溝墓は確認されていない。能登町明泉寺境内・鎌倉屋敷では、五輪塔や宝篋印塔が源頼朝の墓と伝承される大型の宝篋印塔を中心に集められている。14世紀～15世紀の火葬墓の集団墓地とされ、永享三年(1431)銘を持つ五輪塔地輪の下から珠洲焼四耳壺の蔵骨器が出土している。七尾市三引遺跡は、14世紀～15世紀代に配石墓と土坑墓が造営され、蔵骨器が出土している。石造物は後出的な墓に伴うとの指摘があるが、塚には杉が神木として祀られており、当時から墳墓の標識となっていた可能性がある。七尾市中笠師中世墓群では、14世紀後半～16世紀前半の配石墓を検出している。内部に蔵骨器、火葬骨ブロックを持ち、上部に五輪塔と板碑を確認している。

能登町五十里洞穴中世墓や志賀町地頭町中世墳墓窟などの墳墓窟が14世紀代に見られる。上部に五輪塔や宝篋印塔、板碑が置かれ、下部から蔵骨器や火葬骨が出土している。石塔の組合せがわかる好例である。奥壁の鉄釘や棒を渡していた可能性がある側壁に掘られた穴には、懸仏や位牌がかけられていた可能性が指摘されており、興味深い。

加賀・能登の中世墓 属性別変遷表

		11C		12C		13C		14C		15C		16C
		前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	
加賀	経塚											
	墳丘墓				火葬							
	周溝墓					火葬						
	配石墓					火葬						
	土坑墓			上土葬, 下火葬								
	木棺墓		土葬									
	甕棺墓				土葬							
	墳墓窟							火葬				
	地下式墳										土葬	
	屋敷墓		土葬									
	石塔											
	木製塔婆											
	蔵骨器											
	土葬墓		土葬									
火葬墓				火葬								
能登	経塚											
	墳丘墓				火葬							
	周溝墓											
	配石墓					火葬						
	土坑墓					上土葬, 下火葬						
	木棺墓				土葬							
	甕棺墓						土葬					
	墳墓窟							火葬				
	地下式墳											
	屋敷墓											
	石塔											
	木製塔婆											
	蔵骨器											
	土葬墓					土葬						
火葬墓							火葬					

富山県の様相

島田美佐子（財団法人富山県文化振興財団）

木製塔婆の出土事例

中世前半には大型木製塔婆の出土事例はなく、小型の「卒塔婆」・「塔婆」として報告されているものが数例ある。南砺市梅原胡摩堂遺跡(①)出土例は、両面に金剛界・胎藏界を表す梵字が墨書され、同市蛇喰 A 遺跡(②)では、両面に同書式で光明真言の梵字が墨書されたものが2点出土している。

大型卒塔婆の出土事例は、中世後半ではあるが、黒部市堀切遺跡 F 区(③) SD2 から出土している。卒塔婆は 8 点あり、最大のものの残存長は 127cm である。頭部形状は圭頭状と五輪塔状があり、表面に梵字と墨書が認められる。この他には笹塔婆や梵字の残る用途不明木製品、柿経(約 2 万点)が出土している。共伴した柿経は、現在整理中であるが、主に理趣経と法華経が記されている。

石塔の出現と展開

石塔には、五輪塔・宝篋印塔・層塔・板石塔婆(板碑)・一石五輪塔がある。

五輪塔は、中世石造物の中で数量が一番多く、在銘資料には 14 世紀代の資料がある。鎌倉期に出現後、南北朝時代に盛行、16 世紀代には衰退したと考えられる。宝篋印塔は、数量が比較的少なく、関西形式が主体形態で、造立が本格化するのには南北朝期と推定される。層塔は、完形資料は無く、形態から 14・15 世紀代のものが多い。板石塔婆には、県内の石造物の在銘資料の中で最も古いものがある。オベリスク状の形態が多く、これは 16 世紀には小型品となる。種子と五輪図形を刻んだものが半々で、種子は、「パン」、「キリク」が多い。一石五輪塔は、15～16 世紀に盛行したと推定する。

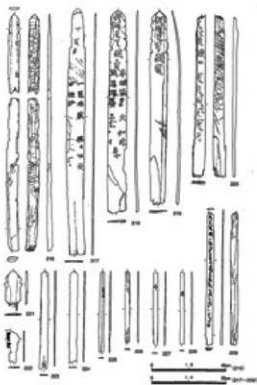
本来石塔は、起塔の功德を信じて造る供養塔であったはずが、16 世紀くらいから本来の意味に変化が生じ、17 世紀前半には石の墓標に影響を与え、石塔風の墓標が造られるようになる。供養塔から墓標への転換を示す事例としては、水見市臨方谷内出中世墓(④)、上市町黒川上山墓跡(⑤)がある。

中世前半の墳墓

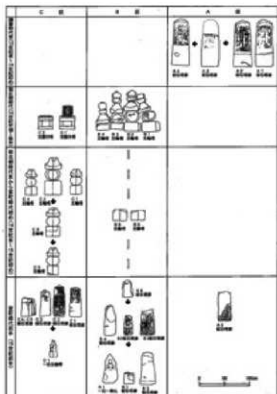
富山県における中世前半の墓の様相は、平野部の集落遺跡内で検出されるものと、丘陵部の寺院など宗教関連施設に伴うもの、単独出土で性格が不明なものがある。集落内での検出例は、南砺市梅原胡摩堂遺跡、高岡市中保 B 遺跡(⑥)、富山市友杉遺跡(⑦)などがある。これらは長方形を呈する土壌墓で、中保 B 遺跡 2 基・友杉遺跡 1 基は共に木棺が遺存している。この他にも、中世前半の集落では副葬品と想定する遺物の出土状況から、土壌墓と推定される遺構が散発的に検出される例がある。寺院など宗教関連施設に伴う例は、南砺市若宮遺跡、香城寺惣堂遺跡(⑧)、黒川上山墓跡などがあり、方形石組墓や墳丘墓などマウンドを伴うものが多い。黒川上山墓跡では、12 世紀後半から 15 世紀初頭までの造墓活動の変遷を追うことができ、8 割以上が火葬と推定されている。特殊例としては、長方形の石組の主体部をもつ下新川郡朝日町の柳田古墓(⑨)がある。その後、集落遺跡の一端に集団墓地と見られる土壌墓群が造られるようになるのは、14 世紀～15 世紀頃である。

火葬の普及

寺院など宗教関連施設では、多くの墳墓において火葬骨が蔵骨器に埋納されており、火葬の導入は早く、12 世紀後半から認められる。中世前半の集落における調査例では、未だ土葬と推定する埋葬例が多く、その検出数から墓に埋葬されること自体が特別な身分であったことが窺える。中世後半になると、集団墓地化した土壌墓が増加することから、埋葬の習慣が一般へ普及したと考える。火葬の一般集落への普及は、現在の事例からは、火葬場と推定される遺構が検出されている富山市金屋南遺跡(⑩)や小矢部市白谷岡ノ城北遺跡(⑫)などが示すように 15 世紀となると推定する。



堀切遺跡 F区 SD2 出土関連木製品



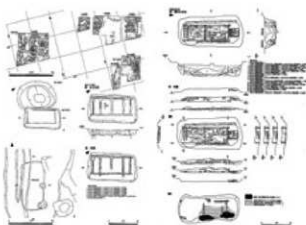
脇方谷内出中世墓変遷推定図

種類	年次在銘資料	形態から時期が判る資料
五輪塔	黒部市萩生の地輪 嘉歴4 (1329) 年 富山市大法寺の地輪 貞和2 (1346) 年 富山市法蔵寺の地輪 応安3 (1370) 年	福岡町西明寺塚2基盛土上13世紀代。 上市町黒川上山2号墓 13世紀前半 南砺市池尻遺跡 14世紀代 水見市藪田薬師中世墓 15世紀前半から後半
宝篋印塔		高岡市蓮花寺 鎌倉期 水見市宇波神社 14世紀 水見市藪田薬師中世墓 15世紀
層塔	富山市友坂熊野神社例 康永2 (1343) 年	
板石塔婆	射水市本江神明社 文永4 (1267) 年 水見市髪塚盛土上 貞和3 (1347) 年 南砺市鍛冶神明社 大永6 (1526) 年 富山市本江経塚 享祿4 (1531) 年 水見市藤井家墓地例、水見市長坂光西寺墓地例 天文3 (1534) 年 富山市上榮例 天文24 (1555) 年 水見市石動山平沢道例 天正5 (1577) 年	射水市(旧大島町)大日寺 鎌倉期 高岡市永願寺 鎌倉時代 水見市脇方谷内出中世墓 オベリスク状の大型品、鎌倉末期
一石五輪塔	立山町芦舩寺 天正14 (1586) 年	

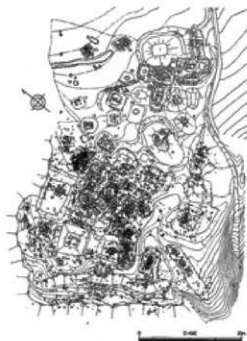
富山県の石塔



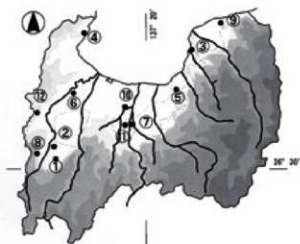
中保B遺跡木棺墓



友杉遺跡木棺墓



黒川上山基跡(中世群)遺構全体図



主要遺跡位置図

引用・参考文献

遺跡番号	出版年	書名	発行機関
	1994	中世北陸寺院と墓地	北陸中世土器研究会
	1996	鶴志・進ぶ・栢る	北陸中世土器研究会
	2000	中世北陸の石塔・石仏	北陸中世土器研究会
	2006	中世墓資料集巻一-北陸編-	中世墓資料集研究会
	1976	富山の石造美術	富田良志、巧玄社
(3)	2006	扇切遺跡F区発掘調査報告書	富田市教育局
(4)	2000	鶴方管内田中曾墓	本見市教育委員会
(6)	2002	中保B遺跡調査報告	高岡市教育委員会
(12)	1991	白谷岡ノ城北遺跡発掘調査概要	小矢部町教育委員会
		梅屋加賀坊・久戸遺跡・梅屋安丸遺跡・田尻遺跡発掘調査報告	(財)富山県文化振興財団
	2006	下巻子曾川遺跡発掘調査報告	(財)富山県文化振興財団
(2)	1990	梅屋胡堂寺遺跡発掘調査報告(遺構編)	(財)富山県文化振興財団
(8)	1993	医王山文化調査報告「医王は語る」若宮遺跡 香城寺惣堂遺跡	医王山文化調査委員会
(1)	1998	蛇喰A遺跡	井口村教育委員会
(9)	2007	富山市金屋南遺跡発掘調査報告書Ⅳ	富山県教育委員会
(7)	2010	友杉遺跡発掘調査報告	(財)富山県文化振興財団
	1992	古倉A遺跡	富山県教育委員会
	1992・1993	古倉B遺跡	富山県教育委員会
	1996	富山県中野町I遺跡	福中町教育委員会
(1)	2003	中名I・V遺跡発掘調査報告	(財)富山県文化振興財団
	2002	清水島I遺跡・中名II遺跡・持田I遺跡	(財)富山県文化振興財団
(5)	2005	富山県上市町黒川遺跡群発掘調査報告書	上市町教育委員会
(9)	1974	富山県柳田遺跡・柳田古墓群発掘調査概報	富山県教育委員会

越後の墓標 - 14世紀以前を中心にして -

水澤 幸一 (胎内市教育委員会)

1. 木製塔婆について

越後における木製塔婆は、1300年前後の紀年銘木簡と伴出した50cm以下の笹塔婆が数遺跡から出土しているにすぎない。主な出土遺跡をあげると、新潟市馬場屋敷遺跡下層(白根市教委1983)、同浦廻遺跡(新潟県教委2003)、胎内市下町・坊城遺跡C地点(中条町教委2001)出土のものがある。

これらで注目されるのは、下町・坊城遺跡例と浦廻遺跡の数例に頭部に墨で黒く塗り、圭頭で2段の羽刻みを入れるタイプが認められることである。これらは、平安末期の『餓鬼草子』に描かれた木製板碑の系譜を引くものであるが、その間をつなぐものは非常に少ない。

2. 石製塔婆について

北陸における最古の紀年銘石造物は13世紀後半である(水澤2001)が、定量的出現は、13世紀第4四半期かと考えられる(ただし越後頸城の関山系石仏を除く)。これは、上の笹塔婆の出現と時期を同じくしており、両者が不可分の関係にあることを意味しよう。越後では、頸城郡で五輪塔が、阿賀北～阿賀南と魚沼で板碑が主に造立される。佐渡では、中世の石造物は非常に少ない。

石塔は、特に古いものの中に中空の納骨信仰が認められるものがあり、その後14世紀後半になると骨壺が埋められた上に石塔が建てられるようになる。ただし、1基のみの場合は骨壺の直上に立てられる場合があるが、多数の場合は、必ずしも直上ではない場合が多いことから、骨壺の納入と石塔の造立にはタイムラグがあるものと考えられる。

3. 木製塔婆と石製塔婆の関係

上でみてきたように、13世紀以降基本的には不朽の材である石製の塔婆が墓標としての位置を確立していく。木製品は、石塔が出来上がるまでの早い段階での供養や葬儀の場での一時的な役割を果たすようになる。それが笹塔婆の盛行につながり、現代にまで続いている。今回の研究集会は、能登の野々江本江寺遺跡での木製塔婆の出土を契機としているが、今回の集成及び遺存条件の悪さを考えても12世紀以前の段階で塔婆を立てられた階層は、ごく一部にとどまるであろう。その裾野が広がるにつれて、多種の墓標が選択されることになり、それらは野外で長持ちする石塔が占めることになる。12世紀の段階で木製塔婆が選択された理由としては、やはり加工技術によるものと思われ、石塔造立集団が各地に定着するまでには、東大寺再建にかかわった宋人工石の将来から一世紀の時がかかったということとだろう。

参考文献

- 石川泉理文 2011『野々江本江寺遺跡』
白根市教育委員会 1983『馬場屋敷遺跡等発掘調査報告書』
中条町教委 2001『下町・坊城遺跡V C地点』町埋文調査報告書第21集
新潟県教委 2003『浦廻遺跡』県埋文調査報告書第126集
北陸中世考古学研究会 2000『中世北陸の石塔・石仏』第13回研究会資料
北陸中世土器研究会 1994『中世北陸の寺院と墓地』第7回研究会資料
水澤幸一 2011『仏教考古学と地域史研究 - 中世人の信仰生活』高志書院
山川 均 2008『中世石造物の研究 - 石工・民衆・聖』日本史料研究会選書2



国府別院菩提塔 (22)



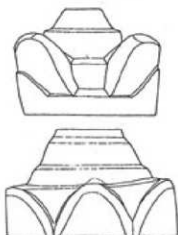
妙高村神町 (23)



頸城村轟田の八幡社 (18)



上越市宮野尾 (1)



上越市南城町稻荷社



三和村大野 (20)



志川町 (19)



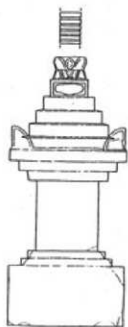
新井市宮本の御母寺 (22)

頸城野五輪塔 S=1/25



上越市五智園分寺 (8)

上越市十倉寺 (11)



新井市大平御母寺

宝篋印塔 1/20



阿賀野市(旧笹神村)出湯華報寺

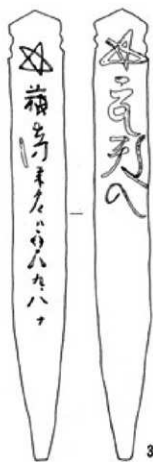


新発田市上石川



板碑

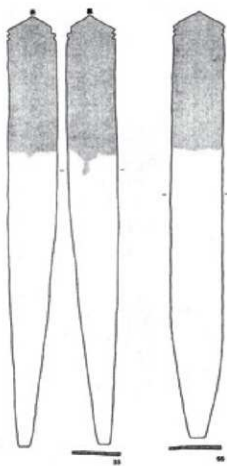
石製塔婆



3



1932



19

20

馬場屋敷遺跡下層

下町・坊城遺跡C地点

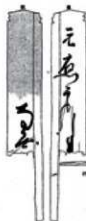


18

19



笹塔婆



浦田遺跡

21

22

木製塔婆

東北地方の塔婆類と野々江本江寺遺跡出土塔婆

山口 博之(山形県立博物館)

東北地方日本海側(青森県・秋田県・山形県)を中心として、当該時期の塔婆資料を瞥見し、さらに野々江本江寺遺跡出土資料についていくつかを指摘したい。東北地方全体の面積は約66,886km²であり、この地域は日本国の約18%を占めている。なお、北海道を含めてその面積を算出すれば約150,338km²となり、国土の約40%にあたる。広大な地域ではあるが出土資料として野々江本江寺遺跡出土資料の類例は得られていない。

まず東北地方全体の様相について触れ、さらに文献資料にも範囲をひろげて野々江本江寺遺跡出土資料についていくつかを指摘したい。

I 東北地方の木製塔婆(10~14世紀代)について

この時代の野々江本江寺遺跡出土例に類する木製塔婆については、東北地方ではほとんど事例を知ることではできない。

青森県の青森市の石江遺跡群では古代末にかかる相輪型の木製品が出土している。これは非常に特殊なものであり類例を探すことができない。後考を期したい。岩手県の平泉遺跡群のうちの志羅山遺跡では、笹塔婆が12世紀代の池跡から出土している。この笹塔婆について高橋実央が詳述している(財)岩手県文化振興財団埋蔵文化財センター2000)。高橋によれば笹塔婆に記される文言から推定される宗教行為として「十齋日」や「現世利益の密教」の信仰などが伺えるという。笹塔婆の使用について出土資料から考察した論考は少なく貴重である。しかしながらいずれの笹塔婆も30cm内外の長さであり、珠洲市野々江本江寺遺跡のような長大なものではない。

この地域には吾妻鏡文治五年九月十七日条に福島県の白河関から青森県の外浜まで一町毎に金色の阿弥陀如来を描いた笠竿塔婆を配したという記録がある。また国宝の中尊寺経の「金光明王経金字宝塔曼荼羅」第三巻には朱彩の笠竿塔婆が描かれている。こうしたものは実在した可能性があるが少なくとも現在まで考古学資料として知見には上っていない。

秋田県北遺跡・州崎遺跡でも鎌倉期前後の墨書資料が出土しているが、これまた野々江本江寺の事例のような法量と形態は持たない。山形県大楯遺跡でも鎌倉時代の笹塔婆が出土しているが小型である。

注目されるのは山形県後田遺跡である。資料は遺跡の中央を南北に横断する川跡から出土したものである。出土状態は川岸ちかくにまとまっており、なんらかの儀礼によって廃棄されたことをうかがわせる。笹塔婆は全形を保っているものを参考とすれば、だいたいのが30~40cm程度である。笹塔婆の先頭部を五輪塔型に切り込んだものもあるが、ほとんどのものは頭部が山形に作られ直下に二条の端刻みを持っている。記される文言は1字だけ配し、続けて南無大日如来と続くのが多い。一部普賢菩薩を記すものもある。組み合わせは大きく分けて笹塔婆+呪符木簡となる。呪符木簡は古代には頻りに出現するがこの時期以降はほとんどみることができなくなる。

後田遺跡の年代であるが確実な紀年銘に恵まれないのだが、笹塔婆の一部に「安仁年二月九日」と記されている資料がある。この文言をどう読むかについては議論の分かれるところであり明確な結論は出されていない。私案ではあるが「安仁年二月九日」は、「安貞二年二月九日」を略したものと思っておきたい。この資料自体笹塔婆としては大型であり、鎌倉時代までさかのぼる古い様相を持っていること。また日本の年号で安を配するものは鎌倉時代では安貞のみであること。二月九日はおそらく時正であり彼岸をあらわし、時正は鎌倉時代から板碑など石造物に記されることが多くなること。さらに紀年には慶長五年を慶と年号2文字目を略す場合などがあること。などによる。こうした推定

により木簡の紀年を安貞二年と見れば1228年ということになる。これ以前の安元二年(1176)も考察の対象ではあったが、12世紀代の遺物はまったく見ることができなかったため除外している。

以上のようなことをまとめれば、古代的な木簡の様相はおそらく11世紀ごろに大きく変わり、12世紀になるとより後の時代に連なるような笠塔婆などの出現を見る。また、呪符木簡もこの時期を境として徐々に消滅していくとみることができよう。

しかしながら、野々江本江寺遺跡のような巨大な木製塔婆はこの地域ではみることができないのである。つぎに石造物の様相について触れてみよう。

II 石塔の出現と展開の諸相について

この地域の石塔の出現は12世紀代にさかのぼる。紀年のあるものとなないものがあるが、紀年のあるものは、天養元年(1144年)山形県山形市立石寺「如法経所碑」などが上げられる。この石造物は凝灰岩製品であり全体として駒型に整形した石材の碑表に長文の文言を刻むものである。如法経を納める趣旨をその内容とし、経塚の造営記念碑としての意味があろう。なお、こうした如法経碑は全国でこの時期(11~13世紀中心)に営まれ、立石寺の事例はその北端をなしている。

またこの時期12世紀にさかんに石塔が造営されるのは、奥州藤原氏の根拠である岩手県平泉である。ここには、五輪塔(中尊寺釈尊院五輪塔が我国における在銘最古の五輪塔で、反花座の側面に平安時代後期仁安四年(1169)の紀年銘がある。)、平泉聖宝塔(平泉に特徴的な宝塔であり、分布の中心が平泉を中心とした奥州藤原氏の勢力範囲と重なる。)、や伝教大師坐像、阿彌陀如来などの大型石仏、さらには磨崖仏がある。しかしながら平泉以外の地域ではこうした石造物の造営は例外的である。

13世紀代の半ば以降になると板碑を中心とした石造物が営まれるようになる。これは野々江本江寺の木製塔婆の存在と関係して興味深いものがある。板碑は、青森県大光寺遺跡出土木製品を例として考えれば、素材を超えて相互に型式を交換する場合があると考えられはしまいか。青森県大光寺遺跡出土木製品は、報告書によれば長さ約157cm、幅約35cm、最大厚約9.5cm、最低厚約2cmである。頭部と思われる部分は逆台形状の突起があり、その下が半月状に盛り上がり、2条の刻線が施される。その盛り上がりから下は平坦に削られている。その下は腐朽しているものやや厚みをもたせており、この部分を地面に差し込み板碑状に起立するのであろうという。種子などの痕跡はない。このような板碑状木製品の類例は、北海道ノ国町の勝山館でも見受けることができる。

実はこうした形と類する石造物が山形県天童市を中心とする地域にあり、成生荘型板碑(通常山形となる先端部が三角形に屹立せずお椀状に盛り上がる型式の板碑)と呼ばれている。成生荘型板碑や大光寺遺跡出土木製品のような頭部形態の遠隔の地域での類似は、共通の祖形といったものがあることにより生じるのではなからうか。

石造物の板碑と大光寺出土木製品などはきわめて類似することは、共通する概念を表現する際に素材が異なるだけであったとみることができのかもしれない。つまり木製品と石造物は型式を相互に交換しうる存在であったとみることができのかもしれない。山形県天童市周辺の成生荘型と青森県の大光寺遺跡出土木製品や山梨県の板碑などの類似性はこうした理由によるものと考えておきたい。さらに野々江本江寺遺跡出土の笠塔婆と板碑の類似性もこうした理由によるものかもしれない。

III 野々江本江寺遺跡の木製塔婆について

野々江本江寺遺跡の木製板碑、木製笠塔婆に類する資料は少なくとも東北地方では知ることができない。このため東北の事例から論及できる点は少ないのだが、資料検討会で実見した内容を含めいくつか指摘しておきたい。

野々江本江寺遺跡木製笠塔婆の実見により、種子を刻む部分の一部に朱彩の遺存がある可能性を

指摘したい。実は朱彩の笠塔婆には類例が存在するのである。まず東北地方の岩手県平泉町にある国宝中尊寺経の「金光明王経金字宝塔曼荼羅圖」第三幀に描かれる朱彩の笠塔婆像と共通する。この曼荼羅圖は「金光明王経」經典の文字を以てて宝塔一字を表したものであり、宝塔の左右に經典の趣意を絵像で表している。ここに朱彩の笠塔婆とこれを斧で切り倒そうとする人物が描かれている。12世紀に遡る事例となる。さらに吾妻鏡文治五年五月八日条には「…塔婆。被塗朱丹也。…」と記されており、塔婆は朱色に塗る場合のあることがわかる。同じように『餓鬼草紙』の塔婆は「河本家本」（東京国立博物館蔵）にある有名な石積み塚の上にある弥陀三尊を描いた笠塔婆には朱彩があり、おなじく「曹源寺本」（京都国立博物館蔵）の塔婆にも朱彩がある。餓鬼草紙の成立年代は12世紀代である。12世紀から13世紀の塔婆は朱彩されることがあるということを指摘しておきたい。

さてもう一点であるが、東北地方の事例からは水辺に関係して笠塔婆などが出土する場合のあることを報告した。さて、野々江本江寺遺跡の木製塔婆が出土した位置であるが、金川の河辺に位置している。想像をたくましくすれば金川河畔に木製塔婆が立ち並ぶ風景を思い浮かべることができる。実は木製塔婆は河畔に立ち並ぶことがあったのである。奥書に正安元年（1299）の紀年を持つ『一遍上人絵伝』には、木製塔婆がさまざまな場所に描かれており、当時木製塔婆がいかなる場所に営まれていたのかを示している。この中の『上野の踊屋』の場面には一遍によって造られた簡素な踊り屋が描かれているが、その周辺の風景として、川とそこに架け渡される板橋、さらに街道が描かれ、街道が川を渡りたあたりには木製塔婆が林立しているのである。こうしたあり方はおそらく水辺の祭祀として笠塔婆などが使用されたことと関連している可能性があるのかもしれない。中世には河畔に木製塔婆が営まれる場合があったことを指摘しておきたい。

最後にではあるが、野々江本江寺の塔婆が3本出土していることからすれば三尊形式になるのではないかとことや、額に記された種子は何かなどということについては引き続き興味をもっていきたいと思っている。

参考文献

- ① 男鹿市教育委員会2005「脇本城跡」男鹿市文化財調査報告書第29集
- ② 宮城県教育委員会2006「中野高柳遺跡Ⅳ」宮城県文化財調査報告書204集
- ③ 佐川美術館2004「国宝中尊寺展」
- ④ 岩手県埋蔵文化財センター他1995「発掘された北の郡」
- ⑤ 元興寺仏教民俗資料研究所1976「明王院の碑伝」
- ⑥ 秋田県教育委員会2001「北道跡」秋田県文化財調査報告書第315集
- ⑦ (財)岩手県文化振興財団埋蔵文化財センター2000「志羅山遺跡第46・66・74発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書第312集
- ⑧ 浪岡町2004「浪岡町史第二巻」
- ⑨ 大石直正・川崎利夫2001「中世奥羽と板碑の世界」
- ⑩ 秋田県教育委員会2000「州崎遺跡」秋田県文化財調査報告書第303集
- ⑪ 山形県埋蔵文化財センター1997「後田遺跡・大道下遺跡第2次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第49集

討論と展望

魚水 環（財団法人石川県埋蔵文化財センター）

研究集会のまとめにかえて、出席者および発表者による意見交換を行った。意見交換に先立っては、木製塔婆の環日本海域各地における出土・確認事例について、改めて事例や年代の確認がなされた。

野々江本江寺遺跡出土の木製板碑・木製笠塔婆を除けば、木製の板碑と笠塔婆が同時に出土した例は知られておらず、その定性的な説明は難しい。

板碑に類似する遺物が出土した例としては、山陰地方で、鳥取県米子市の吉谷亀尾前遺跡から出土した木製品が挙げられる。大きさ・形状とも板碑に類似しており、また、出土状況から、原位置での出土ではなく廃棄、または転用されたものであろうと思われる点も野々江本江寺遺跡の例と一致する。さらに報告では、8～10世紀とされる年代にも、上述の状況から検討の余地があるとしている。

加えて、同じ鳥根県出雲市の山持遺跡Ⅲ-2区から出土した木製品は、板碑の数少ない類例のひとつと言える。上記2点に比べると形状は大型であるが、ある程度まとまって出土しており、原位置を保っている可能性も考えられる。年代としては少々下るようで、13世紀末～14世紀の年代が測定によって与えられている。なお、同遺跡からは角柱状の木製塔婆も出土しており、共存する白磁から11世紀後半～12世紀前半の年代が与えられている。

笠塔婆や板塔婆等、ほかの木製塔婆類については、各地域で出土するものの時間差があり、出土例もそう多くはない。しかし全体としては、12世紀後半から後がひとつの目安となって全国的に広がりを見せるような傾向が見られる。

木製塔婆が石製塔婆へと移り変わっていくとすれば、その過程で木製塔婆や笠塔婆や板塔婆、あるいは宝輪など、多くのバリエーションが見られることはどのように位置づけられるか、といった問題提起もなされた。これに対して、山陰からは、木製板碑に同定されうるものは出土していても、石製板碑は山陰で確認されていないこと、また九州からは、木製卒塔婆よりもむしろ石製塔婆が先行して存在するかのような様相すら見ること、そして、そもそも木製塔婆は出土例自体が乏しく、その用途・機能を明らかにすることは難しいことなどから、木製塔婆が石製塔婆に移り変わっていくとは一概には言い切れないとする慎重な意見が見られた。



意見交換の様子



意見交換の様子

また、石製塔婆等も含めた「墓標」全般に関することとして、墳墓上に墓標を建てることについて、「一遍上人絵伝」等を引き、墓の表象物とし

て木製の墓標を建てる可能性の指摘があった。これは五輪塔などがマウンド上に建つことはままある、との指摘にとどまっている。

墓標については更に、石製塔婆と葬制と墳墓形態のそれぞれの変化について、その同時性が検討された。木製塔婆の広がりと同様、各地域によって時間差はあるものの、12世紀後半ごろから14世紀にかけて、主に社会的階層の高いものを端緒として徐々に浸透していく様子が各地域で見られた。

当然、このような変革がなぜその時代に起こるかが疑問としてあげられるが、これに対する考古学からの返答は難しい。その中で、石製塔婆などの地上表象物は、これを作り得た権力と、その継承者を永続的に後代に示すためのシンボルという機能があったのでは、という意見が見られた。平安期は社会的地位に関して、古代から国家制度による保証が残存していたのに対し、鎌倉初期ごろ、ないし室町期からは自分の力(権力・能力・その正統性等)については自分で主張せねばならず、また主張することで周囲から認められるという社会に移っていったことが背景にあるのではないか、ということである。

討論の最後には、まとめとして、吉岡康暢先生から今後の展望が以下のように示された。

中世人にとって信仰・宗教は欠かせないキーワードであった。木製品の残存状況が限られている中、公界論的なものを含めた世界観に対し考古学がどこまで踏み込んでいけるか。その点においても野々江本江寺遺跡の事例は12世紀の空白を埋める、大きな発展となりうる発見である。しかし、まずは場の産物であるか、また墓標塔であるのか、といった前提となる議論を明確にする必要はあろう。

翌29日は、県内各地から出土した木製塔婆関連遺物の資料見学会が行われた。七尾市小島西遺跡・金沢市豊穂遺跡の板状木製卒塔婆、七尾市三室オンド遺跡の木製風招、中能登町水白モンシヨ遺跡・宝達志水町南吉田葛山遺跡の笹塔婆、小松市浄水寺跡の木製宝珠と笠、金沢市梅田B遺跡・小松市千代・能美遺跡の笠塔婆の笠と思われる木製品などが他に展示された。珠洲市野々江本江寺遺跡出土の木製笠塔婆の額に描かれた梵字の解釈については異なる見解も出され、笠塔婆と板碑の設置状況の復元の試みなども含め、活発に議論が交わされた。

なお、付記した表は、今回報告された資料を整理したもので、討論における基礎資料として用いたものである。諸氏の理解の一助となれば幸いである。



意見交換の様子



資料見学会の様子

付表：環日本海文化流調査研究委員会「中世日本海地域の遺跡—その出現と展開—」 検討資料

地域	木柵塔婆(古代～中世前半)				石製塔婆				火葬	
	遺跡名		時期	種別	遺跡名		時期	種別	出現期	普及期
	遺跡名	種別	時期	種別	遺跡名	時期	種別	出現期	普及期	
石川	珠洲市野々江本江寺遺跡	塔婆	12C 頃	板碑	弘安二(1279)年	14C 代	板碑	14C 後半～	13C 後半	12～13C に木柵墓や墳丘墓が遺存され、14C から五輪塔を伴う配石墓
	小松市浄水寺跡	宝珠	11～12C	五輪塔	徳富町兼光寺中世墓	14C 代	五輪塔	14C 後半	13C 前半	
	七尾市小島西遺跡	塔婆	11C 末～12C	層塔	穴水町明泉寺石造五重塔	14C 前半	層塔	14C 前半	13C 後半	
	金沢市野田 B 遺跡	塔婆	13世紀中葉	層塔	輪島市白山神社石造五重塔	14C 代	層塔	14C 代	13C 後半	
	佐賀市大西屋敷遺跡	塔婆	12C 後半	層塔	珠洲市八幡神社	永和二(1376)年	層塔	永和二(1376)年	13C 後半(高階層のみ)	
	神高市城原三本谷河邊跡	塔婆	12C 後半	五輪塔	赤井市彌吉堂梵字阿弥陀三尊碑	延応二(1070)年	五輪塔	延応二(1070)年	13C 後半	
	大野町市大野町史庫(根尾首寺)	塔婆	嘉禄三(1227)年	五輪塔	白幡市中尾堂々廻五輪塔	寛弘二(1170)年	五輪塔	寛弘二(1170)年	12C 後半	
	米子市吉谷尾前遺跡	塔婆	13C 末～14C	五輪塔	鷺本市本光寺塔婆	安元元(1175)年	塔婆	安元元(1175)年	13C 後半	
	松江市原の前遺跡	塔婆	平安時代後期	五輪塔	倉吉市広瀬ヒイテ山五輪塔	12C 中頃	五輪塔	12C 中頃	13C 後半	
	出雲市山持遺跡	塔婆	13C 後半～14C	五輪塔	(倉吉市)大日寺五輪塔	文永二(1205)年	五輪塔	文永二(1205)年	13C 後半	
福井	未確認				倉吉市大日寺中殿坊19号塔	平安末～鎌倉初	五輪塔	平安末～鎌倉初	14C 中葉～	高根原13C～、島取原12C 遺跡～中葉
	未確認				琴浦町石賀弘文氏五輪塔	鎌倉初期	五輪塔	鎌倉初期	14C 中葉～	高根原13C～、島取原14C～中葉
富山	南砺市梅原胡堂遺跡	塔婆	13C	五輪塔	福井市深谷町	五輪塔	五輪塔	五輪塔	13C 後半	13C 後半～
	南砺市乾吸 A 遺跡	塔婆	13C 後半～14C 初	五輪塔	取井市上金屋八幡神社	板碑	五輪塔	五輪塔	13C 末～	13C 後半～
越前	新島市馬屋敷遺跡下層	塔婆	13C 末	五輪塔	取井市井岡山神社板碑	五輪塔	五輪塔	五輪塔	13C 末～	13C 後半～
	新島市浦邊遺跡	塔婆	13C 前半	五輪塔	輪江市中野勢至堂五輪塔	五輪塔	五輪塔	五輪塔	13C 後半	13C 後半
兼左	平島町平泉遺跡群	塔婆	12C 後半	五輪塔	上市町黒川上田2号墓	五輪塔	五輪塔	五輪塔	13C 後半	13C 後半
	福内町下町・坊城遺跡 C 地点	塔婆	13C 前半	五輪塔	智水市本江神明社	五輪塔	五輪塔	五輪塔	13C 後半	13C 後半
東北	福内町使田遺跡	塔婆	12C 末～14C	五輪塔	黒田市野生	五輪塔	五輪塔	五輪塔	13C 後半	13C 後半
	福内町使田遺跡	塔婆	12C 末～14C	五輪塔	阿賀野市出雲草園寺	五輪塔	五輪塔	五輪塔	13C 後半	13C 後半

(種別・名称・時期は報告に準じる)

埋蔵文化財センター周辺遺跡の紹介

岡本 恭一

はじめに

私は昭和46年頃から金沢市内の遺跡の踏査を行ってきた。踏査地域は犀川上流部の熊走町から中・下流部の入江町等犀川流域が中心である。ここでは、私が天池町、三小牛町等埋蔵文化財センター周辺に在る遺跡で採集した遺物を中心に紹介したい。

菅池C遺跡

この遺跡は、埋文センター対岸の標高400m前後の犀川河岸段丘上に位置する。鉄塔建設の為、削り取られた赤土上で平成2年、松山和彦氏によって表面採集されたものが、旧石器時代の石刃であり、金沢市最古の遺物である。

角間川遺跡

昭和50年、生きた化石と呼ばれる「ウスバシロ蝶」を採集しに行った折、帰り際に林道の斜面で2点の土器片と1点の石器を採集したもので、その内1点が縄文時代早期中葉の山形押型文であった。

天池遺跡

昭和51年「ギフ蝶」を採集しに行った際、金沢工業大学天池自然学苑建設現場で十数点の土器片と石器を得たもので、土器片は縄文時代早期中葉戸田下層式に比定できるものである。金沢市教育委員会と沼田啓太郎先生の指導の下、石川考古学研究会々員等による発掘調査が行われ、土坑2基、配石状遺構1基、数十点の縄文土器片、尖頭器を含む石器を発掘している。平口哲夫氏から石器実測図の複写図を頂いた。

中戸遺跡・中戸B遺跡

昭和51年に土地改良が行われた折、浅井勝郎氏が発見されたもので、同年5月に一日だけの発掘調査が行われ、縄文時代前期後半の数十点の土器片、石器等が得られている。土器は前期後半の十三善提式のものである。また、石刃1点が表面採集されている（打点が除去されており、ナイフ型石器かもしれない）。発掘調査については、「石川考古学研究会々誌18号」に詳しい。

また、平成8年、埋文センター建設に際して発掘調査が行われ、住居址状遺構2基と草創期に溯る物であろう有舌尖頭器が発見されている。参考として珠洲市出土の2点の草創期尖頭器の実測図（原図、平口氏）を掲げる（第1図4・5）。B遺跡は建設工事に先立つ試掘調査により発見されたものであり、時期は詳らかでない。

大桑中平遺跡

昭和47年果樹園開発の折、浅井勝郎氏によって発見されたもので、同年に一日だけの発掘調査が行われ、数百点の縄文時代中期前葉の土器片と石器等が出土した。沼田先生により大桑式と提唱され、全国の編年に活用されている。

大桑七兵衛平遺跡

三小牛山入り口の河岸段丘上に位置する。詳細については「石川考古学研究会々誌24号」を参照されたい。

三小牛法師の淵

別所から「アユ」を釣るために川へ降ると「法師の淵」の真上に平坦面が在り、縄文時代の土器片、

石器等が表面採集できる。

その淵には春に「サクラウグイ」呼ばれる魚が数千匹の大群で川を廻り、産卵する。「ウグイ」とは春に川を下り海で「マルタウグイ」と呼ばれる体長70cm前後となる個体と、川を廻り、オスは桜色の婚姻色を発する25cm程のものがいる。捕り方は簡単で、投網を入れれば一度に数十匹も獲れ、その後の処理も簡単で、その日の内に天日乾燥出来、縄文時代にも盛んに利用されたと考えられる。現在、犀川に群れなす「ウグイ」は見られず、絶滅状態にある。

三小牛作業場遺跡

この遺跡は、昭和6年陸海軍による飛行場建設の際に破壊されてしまった。その際に若干の縄文時代の土器片、奈良・平安時代の土師器、須恵器片が発見されている。飛行場としては、太平洋戦争時、戦闘機2機が小松基地に向かう途中不時着し、翌日多数の金沢市民に見守られ離陸したのが唯一の記事である。また、「自衛隊演習場」の一部に包含層が残っている。(岡本晃見代)

三小牛地獄谷

当遺跡は、作業場遺跡からやや下った丘陵面に所在する。昭和56年に自衛隊が、装甲車を通す為ブルドーザーで山林を削り取った際、縄文時代、奈良・平安時代の土器片等が出土した。遺跡の大部分は残されている。当時はフェンス等で仕切られておらず、出入り自由だった。現在は無断では立ち入れない。

三小牛ハバ遺跡・三小牛サコ山遺跡

両遺跡ともに地獄谷遺跡より一段下ったところに隣接して所在する。ハバ遺跡は昭和61～63年金沢市教育委員会が発掘調査を行っており、掘立柱建物2棟とそれを取り囲む様に大溝が検出され、古代の山岳寺院と考えられている。それを裏づけるかの様にサコ山遺跡から600枚余りの皇朝十二銭と銅板鋳出仏(第9図-202)が発見された。

小原兜山遺跡

当遺跡は、昭和51年林道開発の際、北陸農政局職員が県教育委員会に遺物を伴い届け出たもので、縄文時代中期の土器片と石錘等があった。

棚杉遺跡(清水平)

犀川河岸段丘標高約400m付近に位置する。昭和47年浅井勝郎氏が発見されたもので、林道斜面に竪穴建物状の遺構が見られ、数点の土器、石器、土師器、須恵器、中世陶磁器片を得ている。また、現在も石囲炉が見られる。

棚杉B遺跡・棚杉C遺跡

棚杉B遺跡は、清水平から300m離れて位置し縄文時代の土器片、打製石斧と剥片を得ている。また、清水平から200m離れて剥片が纏まって得られた箇所をC遺跡としている。

瀬領遺跡

この遺跡は、「金沢市鷹ノ巣城跡」と大部分が重なっており、林道の崖面に竪穴建物状の落ち込みが見られ、縄文時代後期の深鉢完好品が出土している。此処から南へ500m離れて北陸電力の変電所が在り、林道はそこまで続く。その所々で打製石斧や、剥片が表面採取でき、桂質頁岩製の打製石斧状石器は注目に値する。また、奈良・平安時代や中世の遺物も採集出来る。

笠舞A遺跡

「笠舞第三段丘」上に在り、陸軍騎兵大隊長田中好春氏によって昭和3年に壱塚掘りの演習と言う名目で発掘調査が行われ、縄文時代、古代、中世の遺物が多数発見されている。この遺跡については昭和56年発行された『金沢市笠舞A遺跡発掘調査報告書』に詳しい。

笠舞 B 遺跡・笠舞猿丸神社

笠舞 A 遺跡から南西に300m離れた同一段丘上に在り昭和40年代前半の宅地・公園開発の際に、縄文時代晩期の遺物が出土している。同遺跡から東へ200m離れ、鹿角製針、釣針が出土している。また、遺跡から150m離れた猿丸神社境内から昭和46年に石錘、剥片を得ている。

壱町遺跡・兼六園山崎山

市の中心部壱町から凹石、打製石斧が出土している。また、此処から北東200mの兼六園山崎山から、昭和47年に縄文土器片と剥片を得ている。

十一屋遺跡・法師遺跡

犀川左岸の十一屋地内から打製石斧が得られている。また、法師地内から打製石斧が出土し、その場所は不老坂中段と伝える。(河村儀一氏ご教示)

寺地地内

昭和46年に行われた道路改良工事の際、多量の弥生土器、法仏～月影の土器片と伴に縄文時代の土器片、石器等が発見された。

泉野出町地内

この地点は石川県立金沢泉丘高校の裏手に広がる畑地内に在り、現在も表面採集のできる数少ない箇所である。

長坂・野田山遺跡

金沢市郊外に在る野田山左斜面に所在する。長坂二子塚古墳を中心として遺物が広がり、所々で剥片が採集できる。この古墳群の最高所に野田山三角点古墳が在り、隣に野田山遺跡が所在し古代の遺物が採集されている。

犀川鉄橋遺跡

犀川が中流部から下流部に移る地点の川中に所在し、直ぐ傍に「清水の淵」が在り、夏場の渇水期には魚の溜まる処である。昭和53年に石川県立埋蔵文化財センターが発掘調査を行い縄文時代後・晩期の土器片と、特にTK210型式を中心とした古墳時代後期の遺物を発掘している。(1982年 金沢市犀川鉄橋遺跡第1・2次発掘調査報告書)

若松地内

若松療養所と若松刑務所の周辺に在る。昭和50年頃に小片の縄文時代の土器片、剥片が得られており、その内2点が早期の押型文である。その他、古代、中世の遺物も散見できた。(沼田啓太郎氏ご教示)

若松 B 遺跡

浅野川より一段上の河岸段丘上に在り昭和55年道路改良工事の折、法仏～月影式期の多量の土器片と若干の縄文時代の遺物が出土した。

大桑橋遺跡

大桑橋右岸の河岸段丘の一角を占める。昭和46年宅地開発の折、月影式の中型甕(ほぼ完形品)1点と、奈良時代(8世紀半ば)の須恵器坏身を得た。

崎浦地内

昭和初年頃の崎浦古墳群破壊時に縄文時代の遺物が出土している。水田化・宅地化により十数基の墳丘を持つ円墳等が破壊された。市最大規模を誇る古墳群であった。(沼田啓太郎氏ご教示)

館町遺跡・館山町遺跡

両遺跡ともに打製、磨製石斧の出土である。

山科遺跡

昭和40年後半代の宅地開発の際、縄文土器片と打製石斧が出土した。

板屋・袋七曲地内

両地点ともに浅野川の河岸段丘上に位置し、板屋では、昭和46年に縄文土器片と打製・磨製石斧が出土している。七曲では縄文時代の遺物が散見できる。

笠舞日吉神社

昭和46年、笠舞三丁目日吉神社境内とその隣地である畑から、平安時代と中世の遺物を採集している。

三小牛横穴

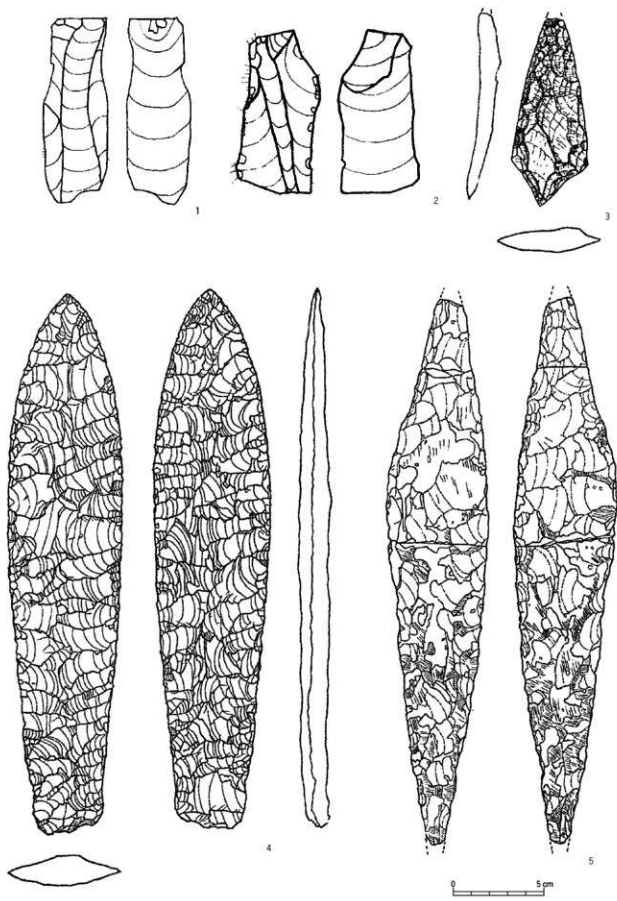
七兵平から作業場に向かう左斜面に、2基は開口、1基は半開口で昭和50年頃まで所在したが、自衛隊の作業道の為に切り崩されてしまった。

終りに

この一文は、埋蔵文化財センター周辺の遺跡について、記録を残す為に記した。本文中に掲げた拓本は筆者の父が採拓した物で、石器実測図は、筆者の他、沼田先生、平口哲夫氏、伊藤雅文氏の手による物がある（沼田先生から複写図を頂いていた）。

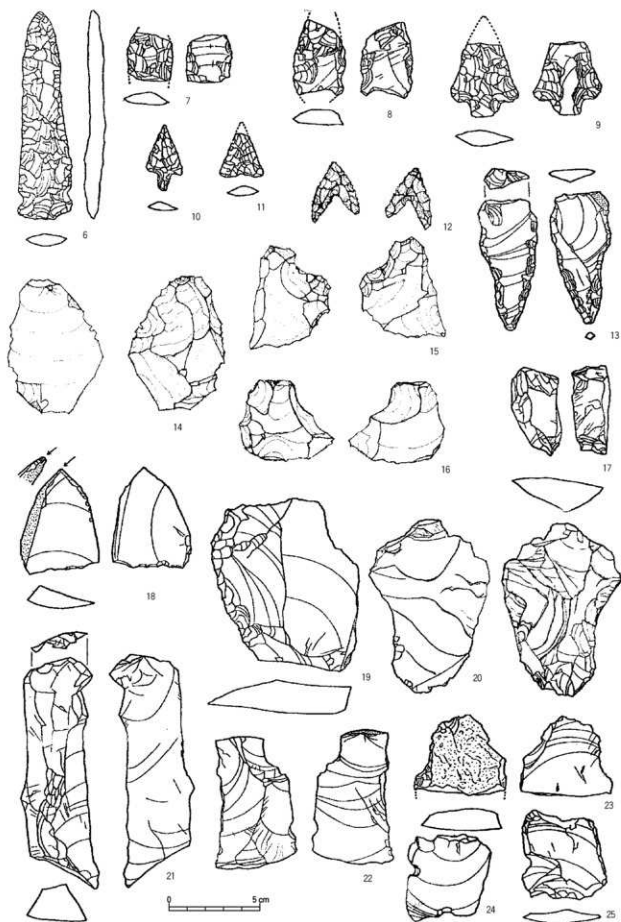
引用・参考文献

- 1971 石川考古学研究会々誌第18号
- 1981 石川考古学研究会々誌第24号
- 1992 石川県遺跡地図
- 1997 石川県立埋蔵文化財センター年報第17号



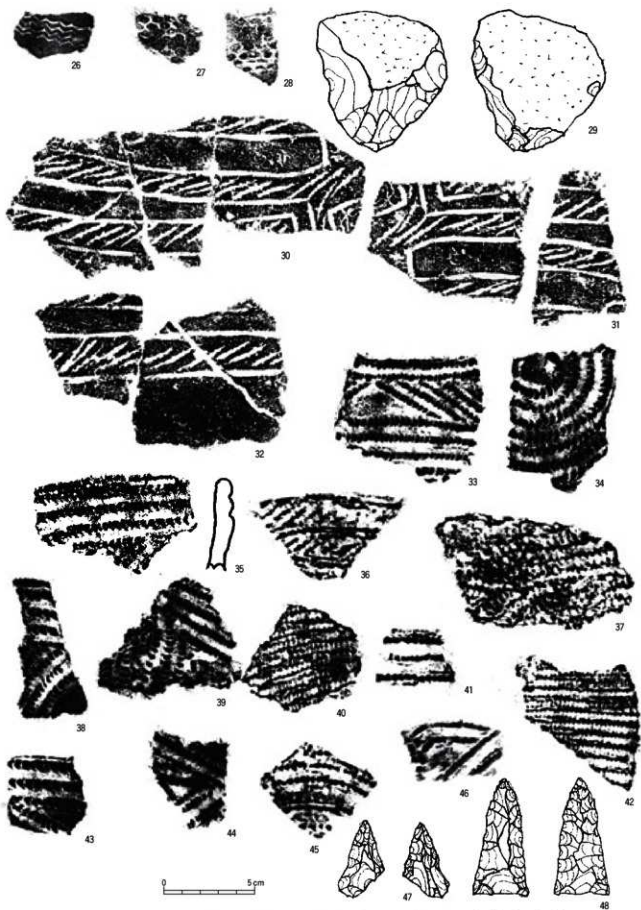
第1図 菅池C、中戸遺跡他石器実測図

石器 S=1/2
3のみ原寸



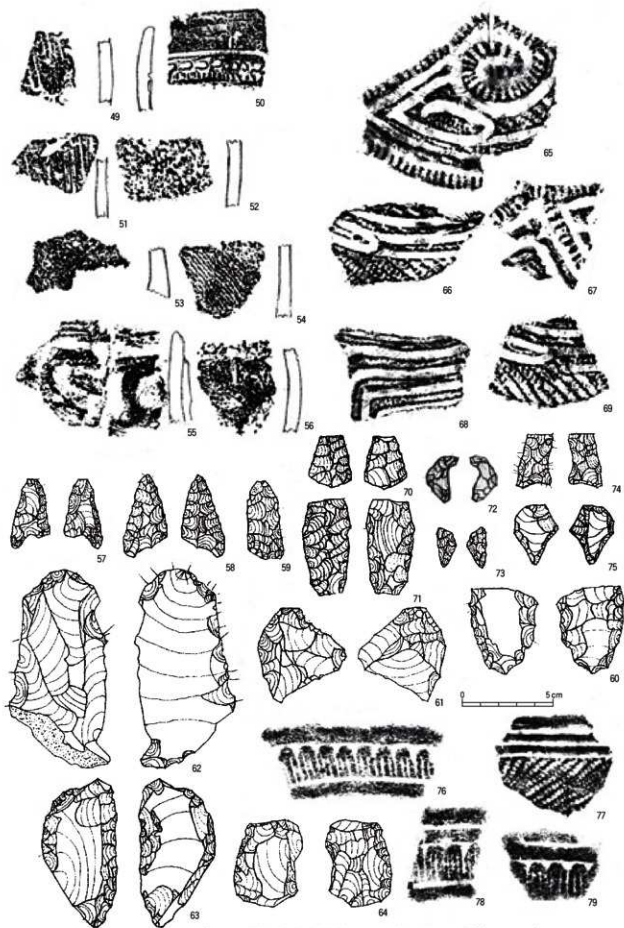
第2圖 天池遺跡石器實測圖

石器 S=1/2



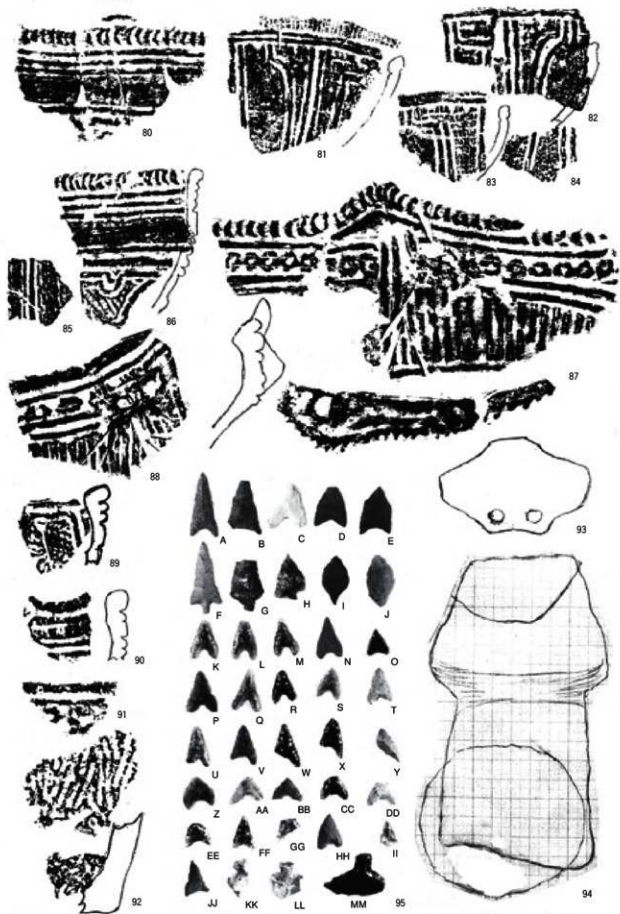
第3図 角間川、天池遺跡他土器・石器実測図

石器 S=1/2
土器 S=1/4



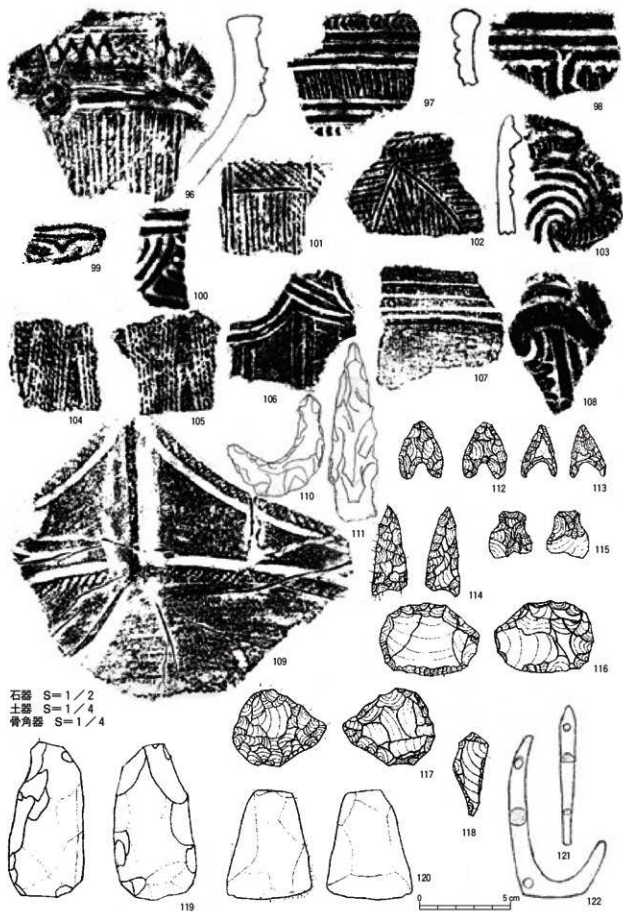
第4圖 楞杉、瀨須遺跡他土器・石器実測図

石器 S=1/2
土器 S=1/4

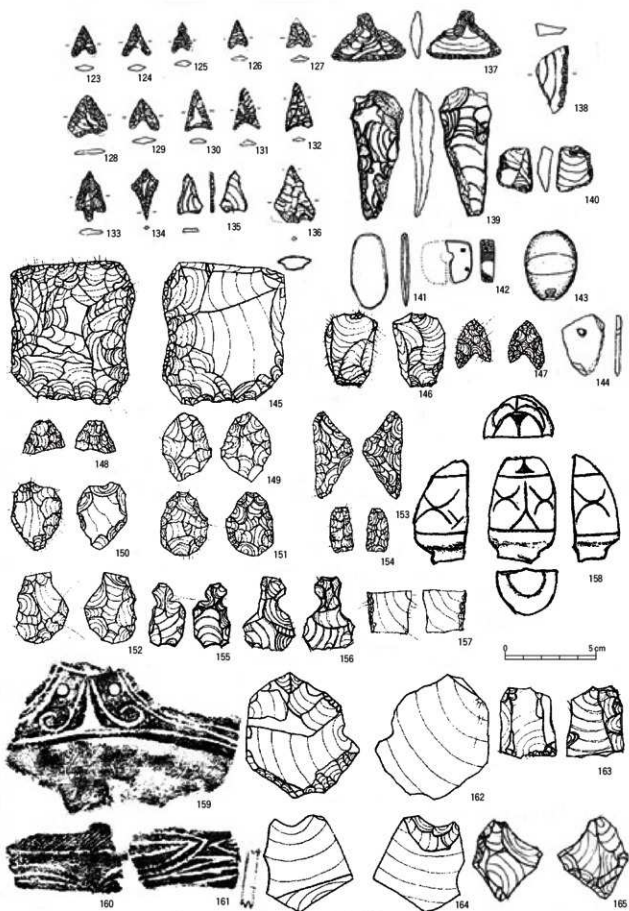


第5圖 中平遺跡土器・石器実測圖

石器 S=1/2
土器 S=1/4

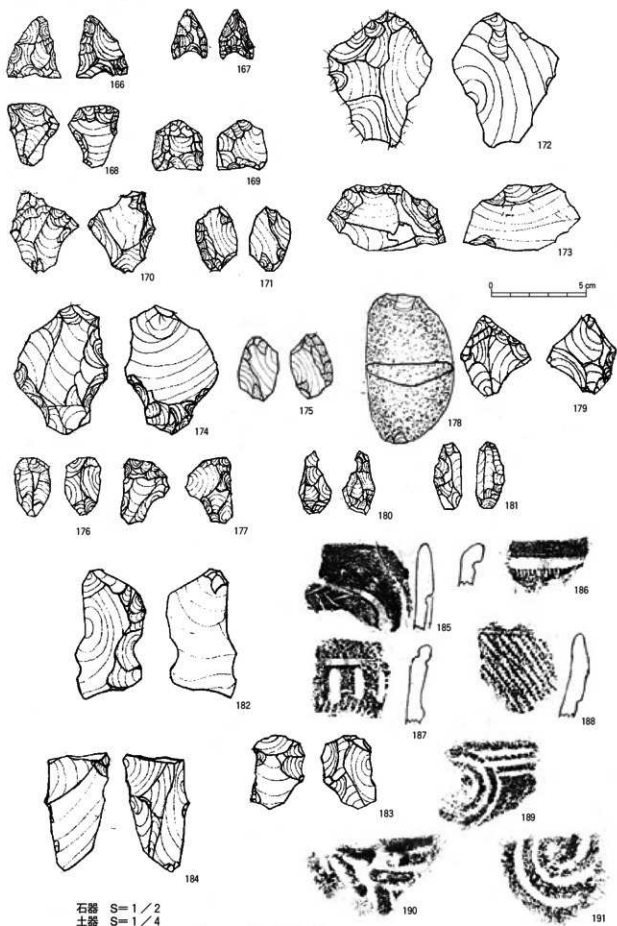


第6图 笠舞A遺跡土器·石器·骨角器実測図

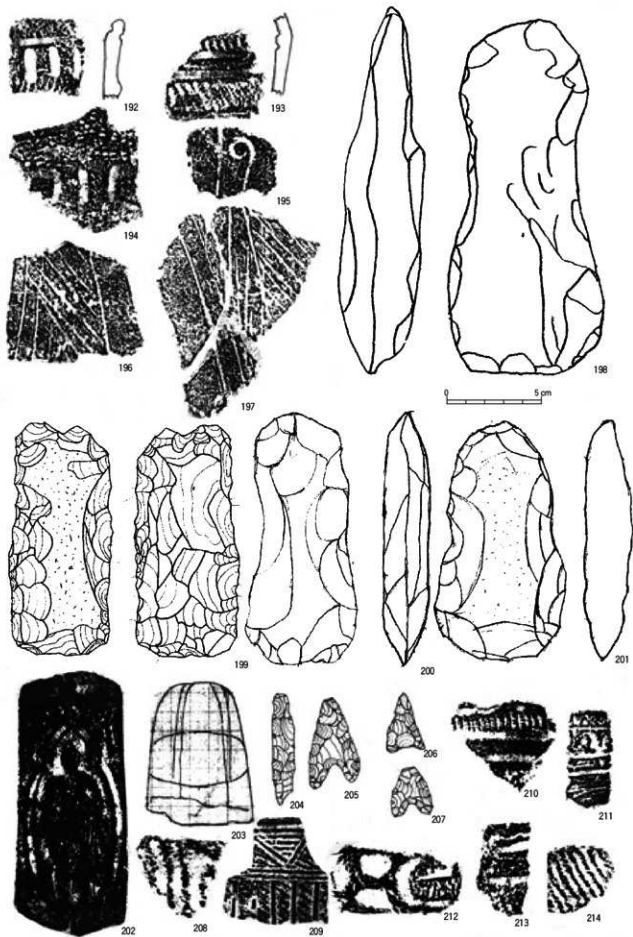


第7図 七兵衛平、三小牛サコ山遺跡他土器・石器実測図

土器 S=1/2
 石器 S=1/4

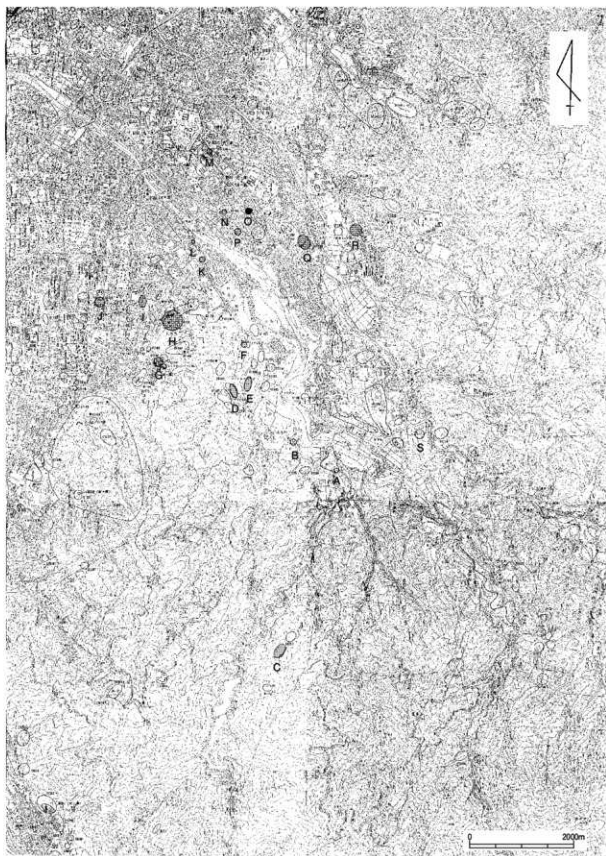


第8図 寺地、山崎山他土器・石器実測図



第9圖 板屋・館遺跡他土器・石器実測圖

石器 S=1/2
 土器 S=1/4
 金銅製品不明



A 埋蔵文化財センター B 法師の淵 C 小原兜山遺跡 D 地獄谷 E 作業場遺跡 F 三小牛横穴
 G 山科遺跡 H 長坂・野田山 I 泉野出町 J 寺地 K 十一屋遺跡 L 法師遺跡 M 山崎山 N 猿丸神社
 O 笠舞遺跡針出土地点 P 日吉神社 Q 崎浦 R 若松 S 袋七曲

第10図 遺跡地図

石川県埋蔵文化財情報

第27号

発行日 2012(平成24)年3月30日

発行 財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1
TEL 076-229-4477 FAX 076-229-3731

URL <http://www.ishikawa-maibun.or.jp/>
E-mail address mail@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 株式会社 橋本確文堂

© 財団法人 石川県埋蔵文化財センター